

3430
71

寫

(分類 1615.1-2)

電 報 譯 文

副社長宛 情報課長發

昭和三年四月一九日午後 四時五八分發
八時一〇分著

十九日歸連シタル野田ノ報告要點左ノ如シ

(一) 第一集團(蔣介石軍)ハ馮玉祥ニ引ヅラレテ北伐ヲ決行セル關係上、策戰及準備モ不完全ニテ、志氣振ハス、民衆又北伐ニ冷淡ナル爲、南京、上海、徐州等ニ於テ後援會ヲ組織シ、志氣ノ鼓舞ニ努メ居レリ。

(二) 第二集團(馮玉祥軍)ハ概シテ軍規整然、若シ南軍ニ革命ノ志

支那内記

第一編乙

南滿洲鐵道株式會社東京支社

支那内記
支那内記
支那内記
支那内記

S

161539

0514

氣アリトセハ獨り同軍ノミ。河南ノ民衆ハ表面靜肅ナルモ、表裏心腹セルニ非ス、排日行動ニ對シテハ日本ニ山東出兵ノ口實ヲ與ヘサランカ爲之ヲ禁シ居レリ。

③武漢派ハ北伐ニ對シテ甚タ冷淡、一般民衆亦同シ、要之今回ノ北伐ニ對シテ南方民衆ハ何レモ冷淡ニシテ上海、南京ヲハ孫傳芳河南テハ吳佩孚ノ復活ヲ希望シ居ルモノノ如シ。

電信寫

(分類 A 6.1.1.1-2)

昭和3 四一八 暗

漢口 本省

四月廿二日 前着

亞

田中外務大臣

高尾總領事

第一四三號

堀參事官（田中副領事同行）昨二十日李宗仁、胡宗鐸、張知本等
當地中心人物ト會見ス談話中參考トナルヘキ點左ノ通

一北伐ハ目下順調ニ進行シ濟南ハ旬日ナラスシテ占領シ得ヘク同

地方革命軍ノ手ニ歸スレハ張作霖ハ自然北京ヲ撤退セサルヘカ

ラス北京占領後更ニ軍ヲ關外ニ用フルヤ否ヤハ先方ノ出方次第

ナリ兩湖軍隊ニシテ北伐ニ參加セサルモノハ今ノ處葉漢、劉興、

周蘭等ノ軍隊ニシテ既ニ城迄出動シ北伐援助ノ爲

タイキ
シツ

S

161530

0560

22

ツアリ爾餘ノ主力軍ハ目下休養旁々地方ノ治安維持ニ當リツツアリ

ニ北京占領後ト雖中央政府ハ依然南京ニ止ルヘシ北京遷都ノ如キハ孫文ノ趣旨ニモ悖リ革命同志ノ欲セサル處ナリ

ニ南京武漢ノ意志疏通ヲ缺クトノ浮説ヲ爲スモノ有ルモ右ハ共產黨其ノ能不逞分子カ何等カ爲ニ宣傳シタル虛報ヲ北方軍閥ニ於テ針小棒大ニ得ヘタル結果ニ外ナラス目下南京武漢ノ間ニハ何等ノ疎隔無ク北伐ハ革命完成ノ第一歩ナレハ相應ノ協助ヲ惜マ
ス

四 敵兵問題ハ李宗仁ノ最も熱心ニ提唱スル題目ニシテ李ハ義ニ南京政治會議ニ提出シタル事有ル由李トシテハ北京占領ヲ一段落

トシテ革命軍事ヲ終結シ中央政府ノ命令ヲ以テ地方治安維持盛
興保護ニ必要以外ノ軍隊ハ一律整理解散シ徹底的ニ裁兵ヲ斷行
スル事ト致シ度ク若シ裁兵ニ異議ヲ唱フルモノ有リトスレハ之
レ新軍閥ノ再生ニシテ革命精神ニ反スルノミナラス國民ノ興望
ヲモ失ヒ當然排除セラルヘシ殊ニ武力ヲ擁シテ中央ノ命令ニ服
セサルノ徒輩ハ武力ヲ以テ脅惑スレハ足ル實行上多少ノ困難有
ルヘキモ裁兵ハ不可能ニ非スト相當決心ノ色ヲ仄カセリト

在支公使、上海、濟南、青島へ轉電シ南京、長沙、九江へ暗送セ
リ

外務省

16151-2

秋

陸 同 文

電 報

參謀次長宛

濟南電第三一號

一 濟南市以一般ニ平穩ナレトモ支那人避難民増加シ

當地中國銀行ハ小ナル取付ヲ受ケツマヤリ

二 督辦署副官ハ内報ニ依リ張宗昌ハ今日明日中ニ一度

歸滬スハレト

三 萊蕪(博山ノ南西)沂水、蔣峪(リョウカト、山東省)方面

未タ平穩裏化ナシ

關東、北京、天津、上海、奉天、濟

昭和三年四月二十二日

四月二十日午前九時四十五分發

濟南、酒井、少佐



161530

0572

馮軍

外務省

秘

陸 同 文

電 報

昭和三年四月二十三日

四月二十日午後二時一五分發

參謀次長宛

天津軍參謀

濟南電第二八號

在濟南酒井少佐電(二十日發)本主上日鄆城ヨリ歸來セル曰
 本人謀者ノ報ニ依テ鄆城ハ十日馮軍ノ爲台領セラレ同方面ニ在
 リン第二十三軍ノ大部ハ降伏シ一部ハ東平方面ニ潰走セリト
 馮軍ハ陝西方面ノ土着軍タル第二土軍(長呂秀文兵力三千)
 ヲ先頭トシ第二騎兵集團(兵力少クモ四千)之ニ續行シ其一
 部ハ十四日、汶上ヲ台領シ主力ハ鉅野、濟寧方面ニ向セ
 南方ヨリ前進セル南軍(第四十七軍並第三十三軍)ト協同シ高
 日鉅野ヲ台領セリト馮軍ハ尙正規軍タル鹿鍾麟軍續行

シ多數ノ糧食等ノ輸重ヲ有シ軍紀嚴正民衆等ニ優
ルモノナリ且不平等條約ノ撤廢及打倒日本帝國主義
ヲ高調シテリ而シテ同軍ハ東平方面ヨリ肥城ヲ經テ秦
安ノ後方ニ迂回ヲ企圖シツアルモノナリ同方面ニ北軍駐シ
ナシ

順東 北京 上海 奉天 濟



昭和3 四三八〇 暗

天津 本省

四月廿六日發着

亞

田中外務大臣

加藤總領事

第三六號ノ一

山東ノ時局急轉ニ關シ

一 當地租界居住ノ要人連ハ一般ニ北伐成功セハ組織的財產沒收拘
禁暗殺等盛シニ行ハルヘシト豫想シ恐慌ヲ來シ居ル模様ニテ駐
屯軍ノ現状租界警備ノ方針等ニ關シ打合セ來ル外南方宣傳員及
共產黨員（例ヘハ陳獨秀、李立三等）多數入込ミ日佛租界ニ委
シ潛メ類リニ策動シ居ルニ付警戒サレタシト内報シ來ル向モア
リ又自己ノ生命財產保護ノ見地ヨリ張作霖一日モ速ニ天津方面

手書



ニ引揚ケ戦線ヲ縮少シテ最後ノ防禦手段ヲ執ルニ至ランコトヲ
希望シ居ルモ張ハ今尙戦局ヲ樂觀シ居ル模様ニ付此ノ際日本側
ヨリ張ニ對シ最後ノ決ヲ爲ス極勸告シ吳レ間敷キヤ等申來ル向
モアル位ナリ歟スルニ是等要人ノ多クハ一身ノ保存ノミニ急ニ
シテ時局ノ移推トハ餘リ關係無キモノト見テ差支ヘ無キモノノ
如シ（續ク）



昭和3 四三八六 暗

天津 本省

四月廿七日 前着

要

田中外務大臣

加藤總領事

第三六號ノ二

「之ニ反シ南方關係者ハ昨今氣焰大ニ舉リ國民黨ニ依ル全國統一ノ事業ハ其ノ間多少ノ曲折アルモ其ノ遂ニ實現スヘキハ既定ノ結論ニシテ今日ノコトアル決シテ意外トスルニ足ラス唯今同ノ北伐ニ際シ最モ心配シタルハ共產派ニ依ル後方ノ擾亂ナリ共產派ハ近時國民黨ヨリ極端ナル壓迫ヲ受ケ居ル關係上民衆ヲ憎ムコト蛇蝎ノ如ク又戰亂ヲ出來得ル限り長引カシメテ自派策動ノ機會ヲ得ントノ動機ヨリ凡ユル手段ヲ講シテ國民統一運動ノ成

功ヲ阻害セントスルノ事實アリ從テ今日ノ國民軍ハ以前ト異ナ
リ共產派トハ何等ノ聯繫ナキノミナリス却テ其ノ第一ノ敵ニシ
テ國民軍カ假ニ京津方面ヲ支配スルニ至ルモ外國人ノ生命財政
ニ危害ヲ加フルカ如キハ毛頭アリ得ヘカラサルコトナリト稱シ

(續ク)

秘

電信寫

昭和三年四月二十九日

大津
本省

四月廿七日前着

亞

田中外務大臣

加藤總領事

第三六號ノ三

山東出兵ニ關シテハ公然之ニ贊意ヲ表スルモノ皆無ナルカ内心
歡迎シ居ルモノモ無キニ非サレト衷心ヨリ出兵ニ反對シ居ルモ
ノモ鮮カラス出兵反對論者ノ言フ處ハ(1)共產分離後ノ國民軍ハ
日本人ノ生命財産ニ危害ヲ加フルカ如キハ全然アリ得ヘカラス
(2)日本ノ大部隊ノ出動ハ全國ノ統一ヲ此ノ一舉ニ實現セントス
ル國民軍ノ活動ニ事實上鮮カラサル困難ヲ與フルモノナリ(3)出
兵ハ條約ニ根據無キハ勿論南京政府最近累次ノ聲明ニ對シ日本

政府ハ何等ノ考慮ヲモ加ヘス南京政府ノ誠意ト面目トヲ無視セ
ルモノナリ(二)日本ニシテ若シ支那國民運動ノ根本精神ニ同情ト
理解トヲ與ヘ一定條件ノ下ニ之ニ満足ヲ與フルノ態度ヲ執リタ
ランニハ兩國間ノ重要問題解決ニ當リ將來多大ノ利益アルヘキ
ニ拘ラス出矢等全然正反對ノ行動ニ出ツツアルハ遺憾ナリト
言フ

在支公使、青島、濟南、上海、奉天ニ轉電セリ

(分類 A 6.1.5.1-2)

昭和3 四三八二 暗

漢口 本省

四月廿六日後着

亞

出中外務大臣

高尾總領事

第一五二號

廿六日本官ヲ來訪シタル李宗仁ノ談話中參考トナルヘキ點要領左ノ通

北伐ノ完成ハ今ヤ時間ノ問題ニシテ濟南北京ハ指呼ノ内ニアリ最近接受セル馮玉祥來電ニ依レハ京漢線方面モ一週間前迄戰況抄々シカラスシテ一時後退シタルモ其ノ後勢ヲ盛り返シ其ノ主力ハ既ニ磁州大名ニ進出シ又山西閻錫山モ娘子關ヲ越ヘテ既ニ井陘ニ前進シ東西呼應シテ奉軍ノ主力ヲ包圍スルノ形勢ヲ示シタルヲ以テ

今後山東方面ノ戰況ノ進展ト共ニ張作霖ハ速カラス北京ヲ撤退ス
ルニ至ルヘシ自分ノ所見トシテハ張作霖ノ失脚ハ殆ト勦カサル間
題ニシテ同人關外ニ通竄シ悔悟下野スルト共ニ部下將領ニシテ國
民政府ニ服從シ三民主義ヲ奉スルノ誠意アルニ於テハ 深ク之ヲ追
求シテ徹底的撲滅ヲ期スルノ必要無ク寧ロ北伐軍事行動ヲ終熄シ
テ楊宇霆張學良等ト共ニ完全ナル建國ノ方途ヲ講シ統兵ヲ斷行シ
以テ國民ノ痛苦ヲ除キ民心ヲ安定セシメ度シ云々
(南京ヘハ上海ヨリ青島ヘハ濟南ヨリ暗送アリ度シ)
在支公使、上海、濟南ヘ轉電セリ

普通第一九〇號

昭和三年四月二十六日

在 濟 南

總領事代理 西 田 晴 一



外務大臣男爵 田 中 義 一 殿

時局ニ關シ當地方面支那住民ノ感想等ニ關スル件

時局急迫シ濟南ハ早晚南軍ノ手ニ歸セムトスル情勢ニアリタルヲ以テ當
地在住支那人等ノ感想等ニ關シ注意中ノトコロ(一)、當地方及田舎ノ住民
等ハ南方ノ非政ヲ充分承知シ居ラサル結果一部ヲ除ク商民等ノ多數ハ前
督辦張樹元、周自齊、田中玉等何レモ多少批難アリタルカ現督辦張宗昌

類 4.6.15.1-2)

46112312

6120055

敗北シ濟南ヲ去ルモ住民ハ甚ノ苦痛ヲ感セサルカ只山東軍退却ニ際シ掠奪等ノ暴行ヲ恐ル、ノミ又避難者ノ多クハ軍政兩界及其ノ關係者ニシテ他ノ住民ハ寧口南軍入市ヲ歡迎シ居ル模様アリト云フ(二)、又重ナル住民中危難ノ急迫ヲ恐レ可成多數日本兵ノ派遣ヲ熱望シ内面非常ニ歡迎シ居ル事實アルモ表面反對ノ態度ヲ示シ居レリ現ニ本月二十二日當地商埠地商總會ハ軍事會ヲ開キ來會者三十餘名ニシテ大略「今回日本ハ名ヲ居留民保護ニ藉リ突然支那内地ニ派兵シタルハ他ニ斷心アルコト明ナリ我前線ハ稍退却ノ狀アルモ戰略ニ起因スルモノニシテ着々有利ニ轉換シ居リ濟南ハ何等危險ナシ日本ノ出兵ハ主權侵略人心ノ動搖ニ關スルコト重大ナルニ付各界一致反對シ日兵ヲ一日モ速ニ撤退セシメ以テ主權ヲ維持シ

後患ヲ免カレムコトヲ望ム」ノ決議ヲ爲シ之レカ交渉方ニ關シ省長ニ請
願スルコトニ爲シタル由ナリ
右何等御參考迄報告申進ス

本信寫送付先

在支公使

青島總領事



昭和三年四月六日 略

濟南 本省

四月廿八日前着

至

田中外務大臣

西田總領事代理

第一二八號

〔今廿七日夜金參謀長ノ内話ニ依レハ潘總理ハ昨日前線ニ行カス
歸京シ王占元ハ孫傳芳ト共ニ界首ニ赴キ前線ヲ觀察シ兩人共本
日午後（脱）督辦ハ未タ前線ニ赴カス孫傳芳ハ明日更ニ前線ニ
赴クト云ヒ居レルモ確カナラサルモノノ如シ界首ニ於テハ山東
軍及孫軍ハ協同シテ最後ノ決戦ヲ行フ筈ナリト然ルニ金ハ若シ
界首ノ線不利ナラハ自分ハ直ニ山地ヲ引揚クルニ付家族荷物ハ
宜敷ク頼ムト本官ニ内話セル點ヨリ察スルニ張督辦ヤ孫傳芳ノ

一般



首領丈力決戦ヲ力ミ居リ小野大佐ノ前線觀察報告ニ依ルモ界首
ハ地勢宜敷ク兵ノ配置モ相當ニ出來居レリトノ事ナルモ山東軍
ハ一般ニ戰意ヲ缺キ居リ山東軍ノ當地留守役ノ幹部ハ一般ニ緊
張シ居ラサルニ徴シ數日内ニ行ハルヘキ界首ノ決戦モ樂觀ハ許
シ難シ

(二)米國新任領事「ブライス」ノ内話ニ大名ヨリ各地ヲ經テ今廿七
日歸濟セル米人ノ實見談ニ依レハ大名ハ平穩ニシテ南樂ハ直隸
軍ニテ占領スルモ山東省ニ入レハ南軍ハ東平ヨリ東阿方面ニ前
進中ニテ東阿ニ在ル少數ノ山東軍ハ近ク退却スヘキ模様ナリ平
陰ニハ相當有力ナル山東軍在リ肥城ニハ孫傳芳軍在リ界首ヨリ
萬縣方面ニハ山東軍及孫軍ヲ併セ約二萬餘有リトノ事ナリ尙察

安ニハ衆人宣教師約十名在住セル處泰安正面ニモ南軍漸次接近セリトノ事ニ付本日自動車ヲ出迎ニ派シタリト

三廿七日午前七時交涉事ヨリ公文ニテ同日午前八時ヨリ當地附近ノ新製兵工廠ニ於テ爆彈ノ演習有ルニ付本邦居留民カ本爆聲ニ驚カサル様注意アリタキ旨通知アリタル處英國領事モ右通知ニ接シタルカ右ハ演習ノ爲不用彈藥ヲ爆發セシムルモノナラント推測セシカ同日本官兵工廠長ニ面會シタル序ニ夫レトナク何故今頃演習ヲ行フヤト尋ネタルニ每週一度演習ヲ行フモノナルカ最近時局切迫セルニ付外國人ノ驚カサル様注意シタル迄ナリト答ヘタルモ英國領事ノ推測或ハ事實ナランカトモ思ハル

在支公使、青島、天津、上海、南京、漢口へ轉電シ奉天、芝罘、坊子、博山、張店へ暗送セリ

亞細亞局

昭和三年五月五日 發

機密第一一四號

昭和三年四月二十八日

在 芝 罘

領事 森 岡 正



外務大臣男爵 田 中 義 一 殿

時局ニ關シ當地總商會ノ打合ニ關スル件

當地總商會ハ去ル二十六日緊急總會ヲ開キ時局ニ關シ一般商民ノ取ル

ヘキ態度ニ付左ノ通り打合ヲ遂ケタリ

一、山東敗軍カ芝罘ニ殺到スル場合ニハ宿舍及給與ヲ準備シ
總商會等ノ

在芝罘日本領事館



161530

0627



舉行ヲ爲サシメサルコト

二、南軍カ進軍シ來ル場合ニハ總商會ヨリ代表者ヲ派遣シテ一先實察
ニ於テ前進停止方ノ了解ヲ求メ地方ノ秩序ヲ維持スルコト

右報告ス

本館寫送付先

在支公使

在青島總領事

在濟南總領事

在芝罘日本領事館

(分類 A6.1.5.1-2)

昭和3 四五二六 暗

漢口 本省

四月廿九日附着

亞

田中外務大臣

高尾總領事

第一五四號

二十八日來漢シタル鄭州日本人會長島田ノ河南ニ關スル談話要領
左ノ通

一 馮玉祥ノ兵力ハ約二十萬ト稱スルモ兵器彈藥甚タ缺乏シ戰闘ニ
耐ヘ得ルモノハ約十萬ニ過キス約一週間前京漢線形勢附近ニ於
テ奉天軍ノ兵器ノ精銳ニ制セラレ主力軍ニ多大ノ痛手ヲ受ヒ大
敗シタルハ事實ナリ殊ニ第二方面軍ノ如キ殆ト全滅セリト迄傳
ヘラル但シ軍敵ノ規律嚴肅節制アル事ハ他ニ類例ヲ見サル程ニ

シテ士氣モ極メテ旺盛三ヶ月以内ニ北京ヲ奪取スヘシト意氣込
ミ居レリ馮ノ下ニハ徐謙ノ外露國人三名アリ表面ハ獨逸人ノ語
者ナリト稱シ居レリ

河南省民ハ馮玉祥ノ苛欲誅求壓迫政治及佛蘭廟宇ノ打壊等軍
閥以上ノ過激政策ニ非常ニ反感ヲ抱キ民心全ク馮ヲ離レ怒聲沸
クカ如ク既ニ南陽ノ岳維峻光州ノ任應岐及田維勤舊部下並ニ樊
鍾秀ノ如キハ舊革命ノ旗ヲ掲ケ民衆ヲ欺キ馮玉祥ヲ倒シ河南人
ノ自由ヲ恢復スヘシト宣誓シテ馮玉祥打倒ノ態度ニ出テ其ノ兵
力約三萬砲二十門ヲ有シ隴海線汜水以西（鄭州ノ西方）洛陽
間ヨリ京漢線ノ西方地區一帯ニ占據シテ馮軍ニ對抗シ今ヤ馮軍
モ腹背ニ敵ヲ受ケ非常ニ困惑シ居レリ

兩湖軍ノ北伐援助ハ如何ナル程度ナルヤ不明ナルモ先發隊葉琪
軍サヘ未タ兗州以上ニハ進出シ居ラス

京漢線ハ定期ニ進行ヲ續ケ途中何等ノ危險ナク又外國人ニ對ス
ル壓迫對日感情ノ惡化等ノ模様ナク在留民ハ完全ニ保護セラレ

居レリ

北京、上海、濟南、南京ニ轉電セリ



昭和3 四六〇二 略

濟南 本省

五月一日前着

重

田中外務大臣

西田總領事代理

第一四一號

在電第一三九號ニ關シ

三十日夕刻黃錫齡ノ内話ニ依レハ

(一) 津浦線ニ於テ鄭俊彦軍ハ敗退シ鄭軍長モ當地ニ歸リ今朝午前二

時張宗昌ト孫傳芳協議ノ結果膠濟線方面モ形勢不利ニ付今夜中

ニ兩人一緒ニ當地引揚ヲ決定シタリ唯孫ハ膠濟線方面ニモ部下

ヲ有シ之ヲ繼メルノ必要アリト申出テタルニ付何カ別ニ企圖ア

ルニ非スヤトモ思ハル張督辦引揚ノ際ハ省長金參謀長モ同行ス

一般

ルコトトナリ居レリ

(二) 南軍ハ津浦鐵路何レカヨリ今晚中ニ濟南ニ入ル形勢ニシテ國

民軍ノ便衣隊ラシキ者約一千五百名城內ニ潜伏シ居ルニ付多分

督辦出發ト同時ニ或ハ明晩邊リ事ヲ起スコトニナ(リ)居(レ)ル

コト警察ニテ發覺シ來リタルモ今ヤ山東軍ノ勢力衰微ノ爲如何

トモ致シ方ナキ狀態ニアリ右便衣隊ハ商埠地內ニテハ我派遣軍

駐屯ノ爲犠牲者ヲ多數出スコトヲ恐レ擾亂ヲ見合セタル趣ナリ

尙同日午後一時小野大佐ヨリノ内報ニ依レハ強州ハ愈一二時

間中ニ強州ニ向ヒ引揚タルコトトナリ同大佐モ同行スヘシ又孫

傳芳ハ張督辦出發ニ引續キ引揚クヘキ筈ナリトノコトナリ

青島ヨリ張督、陳山、坊子ニ電アリタシ

電送第 9067-71 號

昭和 3 年 5 月 2 日 時 0 分 發

一ト伝送ス

支那郵政局

電信課長

主 任

支那郵政局

主 任

(昭和三年五月一日)

(原綴用紙甲) 國幣

支那村局：関心件

支那情報

在英、在米、在伯各大使

在斯嘉坡、在浦津各總領事

田中大臣

合 第 九 五 號

支那情報

山東、戰況、北軍、益々不利、南軍、一部、四月

二十八日、膠濟鐵道、
ハナハ明水ヲ占領シタ

ヲ遮断シ、又津浦線方面ニ於テモ泰安及界ヲ

電信 案

外 務 省

S

161530

0649

首々南軍ハ占領^{せうしん}事ヲ為^{なり}三十日午後張宗

昌及孫傳芳ハ濟南ヲ退去シテ德州方面ニ向ヒ彼

是月一日南京軍ハ先頭ハ濟南ニ入城^し其^こ此間格

別ハ混亂ヲ見^ス但^し南青島方面ハ依然北軍ハ手ニ

在リ之ヲ先我派遣軍第六師團ハ青島、濟

南及膠濟沿線要地ニ配置セシ^{今日}觀望^し處我^は在

苗氏ニハ事^ハ被害ナシ。

秘

昭和3 四八一〇 略

北京 本省

五月四日後着

芳澤公使

田中外務大臣

第五四四號 (秘)

三日張競仁カ有野ニ語ル處左ノ通

一政府ハ今回何豐林ヲ後防總司令ニ任命シ德州ニテ防戦スル爲メ

吉黒軍ヲ陸續出動セシメツツアル旨宣傳シ居ル處吉黒軍ノ入關

シタルハ今日迄ノ處極メテ少數ニ止マリ然カモ最近ハ全然移動

ヲ中止シ居レリ

一 大元帥府ニテハ數日來協議ノ結果此ノ上ノ交戦ハ勝算ノ見込無

キモノトシ既ニ最後ノ引揚方針ヲ決定シ順序トシテ先ツ京漢京

一般

S

161530

0658

緩其ノ他各線ノ軍隊ヲ漸次後退セシメ同時ニ各線ノ車輛ヲ成ル
ヘク多數北京附近ニ集中シ各軍ノ集結ヲ待テ瀋州退却セシメ
張作霖モ一先ツ同地ニ引揚クル協定ナリトノ聞込アリ目下德州
防戦説等頻リニ宣傳シ居ルハ全ク前記各軍隊ノ後退集中ノ餘地
ヲ作ル爲メナルカ如シ

又右ノ次第ニ付政府側ノ宣傳ニ拘ラス一般市民ハ次第ニ不安ヲ感
シ居レルカ一昨日或ル方面ヨリ王士珍ニ對シ前年ノ例ニ依リ治
安維持ノ方法ヲ講スル様相談シタルモノアル處王ハ政府側ノ面
子モアリ時期尙早ナリト答ヘタル爲此ノ點未タ問題トナリ居ラ
ス

要スルニ 一週間内ニハ右張作霖ノ引揚ル後モ判明シ同時ニ恐

慌状態ヲ出現スルモノト認メラル云々

右張ノ談話カ如何ナル程度迄真相ヲ傳ヘ居ルヤ判明セサルモ同日
丁士源モ有野ニ對シ張作霖ノ引揚ハ既ニ内定セリ之カ實現ニハ單
ニ時間ノ問題ニ過キサレ由語リタル趣ナルカ濟南ノ日支軍衝突ハ
右形勢ニ多大ノ影響ヲ與フヘク何レ其ノ内全體ノ狀勢ヲ電報スヘ
シ

奉天、青島、濟南、天津ニ轉電セリ

(分類 16.1.5.1-2)
612.00511

八九號

昭和三年五月四日

在蕪湖

領事館事務代理村田龜八



外務大臣岡田中義一殿

北軍退却ト張作霖ト廣西派各場

風説ニ關スル件

本件ニ關シ當地紳士ニシテ豫テ孫傳芳、馮玉祥等、
參謀タリシ劉淮生及其、他當地ニ、三ノ政客力當館縣
報者ニ内訌セル處ニ依レハ今回張宗昌カ德州ニ退却
セル豫定ノ行動ニシテ其ノ理由トスル處ハ實ニ張作霖

在蕪湖日本領事館

李濟琛、吳佩孚等ヲ大同團結ヲ為シ趙恒惕、楊森
吳佩孚等ハ革命軍力長江ニ於ケル警備ノ手薄ナルニ
乘シ李濟琛ト協力シテ京漢線ヲ北上シ張作霖軍ハ
之ヲ南下シテ馮玉祥ヲ挾撃シ一方吳佩孚ハ總司令
トシテ長江ヲ下流シテ南京ヲ衝キ更ニ津浦線ヲ北上シ
張宗昌軍及孫傳芳軍ハ之ヲ南下シテ山東ニ進出セル
南京軍ヲ全滅セシメントノ計畫ナリト

右廣西派ト張作霖派トノ妥協ヲ計畫セルハ趙恒惕及楊
森ノ二名カ廣西派ニ知己多キヲ利用シ趙ハ既ニ張作
霖ニ代表ヲ派シ居レリト

右ハ俄ニ信スル能ハサルモ何等御參考迄取視ノ條無キ
本信寫送付先 上海、漢口、南京、九江



信寫

昭和3 四九四〇 略

北京 本館

五月六日 蕭

田中外務大臣

芳澤公使

第五六一號ノ一

山東方面ノ北軍敗戦ニ對シ北京政府當局ハ努メテ冷靜ヲ養ヒ領ヲ
 ニ大局ニ何等影響ナシト宣傳シ居ル處諸般ノ情報ヲ綜合スルニ事
 實ハ右ニ反シ張作霖ハ張宗昌ノ敗退ニ對シ極度ニ憤慨シ一般當局
 モ其ノ急激ナル敗戦ニ狼狽シ本月二日ノ總密會議ニ於テ既ニ張作
 霖ノ北京引揚ヲ決定シ夫レ以前ニ於テ成ルヘク早目ニ前線各軍隊
 ヲ集中後退セシムルコトニ一應決シタル模様ナルカ同夜前線ヨリ
 楊宇霆及張學良歸京シ特ニ楊ヨリ樂觀的報告ヲ爲シ引揚ハ時期尙



161530

0669

永田 12

早ナリト主張シタル爲張作霖モ俄ニ元氣付キ前意ヲ翻シタル模様
ニテ一時非常ニ緊張シタル事態ハ目下稍々緩和シ暫ク現状ヲ維持
シ情勢ヲ觀望シタル上ニテ進退ヲ決スルコトトナリタルモノノ如
ク殊ニ三日濟南ニテ突發シタル日支軍衝突事件ニ依リ當分南軍ノ
北進ナキモノトシ北京政府ハ一層此ノ決心ヲ強ムヘシト觀測スル
モノ少カラス（續ク）

昭和3 四九三六

暗

北京 本省

五月六日 晴

要

田中外務大臣

芳澤公使

第五六一號ノ二

一、右張ノ引揚説ニ對シ政府當局ハ當初ヨリ之ヲ否認シ同時ニ二日
何豐林ノ後防總司令任命ニ依リ德州ニ吉黑軍ヲ據シ防戦ヲ爲ス
旨及戰線短縮ノ爲彰德及大名方面ノ北軍ヲ德州及邯鄲ノ線ニ引
下クルコトトシタル旨ヲ發表シ居ル處右ハ全ク人心ノ動搖ヲ防
キ又京津京綏方面ノ奉天軍ノ引揚ヲ全カラシメムトスル爲ノ宣
傳ニ過キストノ説アリ而シテ山西兩部及京漢線方面ノ奉軍ハ其
ノ一部ハ四月三十日頃ヨリ又全部ハ二日頃ヨリ逐次後退ヲ開始

シ居ル様ナル處右後退カ果シテ奉議北京引揚ノ準備ナルヤ又
ハ軍ニ戰線短縮ノ爲ナルヤ目下ノ處尙判明セサルカ一方德州ノ
防戰ニ對シテハ多大ノ期待ヲ有セス又實際其ノ意思ナキモノト
察セラル

右ノ如キ情勢ナルヲ以テ昨今一般人心情ニ不安ヲ増シ殊ニ客月
末國民黨へ北京特別市黨部名義ノ張作霖打倒並帝國主義及日本
出兵反對ノ傳單突如トシテ各方面ニ配布サレタル事實アリ（五
月一日東方電參照）又數日來奉天派要人ノ家族引揚輸出シ（張
作霖ノ家族ハ二日夜出京セリ）尙目下責任ノ屬ニ非サル政客連
ニシテ二日及三日ニ且リ離京シタルモノ少カラス又舊大官等ニ
シテ富館區域内ニ避難方顯出テタルモノ二三アル等（可然拒絕

シ置ケリ一官憲制ノ變遷的宣傳ニ拘ラス人心ハ相當動搖シ居レ
リ

哈爾濱、奉天、上海、漢口、廣東へ特電シ天津、芝罘へ暗送セリ



161530

0673

昭和3 四九五六 暗

北京 本省

五月六日前着

要

田中外務大臣

芳澤公使

第五六六號

四日奉天、劉省清發大元帥宛電報要領左ニ御參考迄（某方面ヨリ内

密ニ隨時入手セルモノ）

三日正午在上海密偵ノ無線ニ依ル報告ニ依レハ蔣介石ハ二日濟南
着直ニ第一第二及第三ノ三縱隊ノ三軍ニ對シ至急濟南方面ニ集中
方命令シタルカ未タ津浦線ニ對スル總攻撃令ヲ發セス蔣ハ馮代表
張之江、閻代表吳藻華方振武陳調元賀龍祖制時順祝同蔣作賓賀國
光等ト濟南ニテ軍事會議ヲ開キ今後ノ軍事計畫ト各線ノ聯絡方法

トテ協議シタル後攻撃ニ移ル事ニ決定セリ又蔣介石ハ蘇塔爾カ爾チ
ノ兩軍ヲ泰安兗州ニ向ケ總豫備隊ニ充テ尙陳訓元ノ第三十七軍ヲ
シテ即刻膠濟線ニ沿ヒ東進シ第十七軍第二十六軍及第二十軍等ト
共同シ青島ヲ攻略スヘク又總攻撃令發令後各軍ハ夫々黃河ヲ渡リ
策應シテ前進スヘク命令セリ

尙賀耀祖ノ第四十軍ハ後方ヲ擔任スヘシ

青島ヘ轉電シ天津、奉天ヘ暗送セリ濟南ヘハ青島ヨリ轉電セシム

(12 函 1615.1-2)

昭和3 四九九二 略

北京
本省

五月六日前着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第五七〇號

張家口發本使宛電報

第七號

外務大臣へ轉電アリタシ

第九號

濟南事件ニ關シ當地ニテハ五日午前何等ノ反響ナシ一例トシテ最近雜穀ノ防穀令ヲ突然實施シ日本商人ノ事前取引ヲ對シテモ輸出ヲ禁セシモ再度本官ノ交渉ニ對シ五割ヲ供託セシ事實有リ

(二) 目下京綏線ハ京綏包大間普通列車ノ運行有リ人心比較的安堵セ
ルモ奉天系家族ハ昨四日夜迄ニ全部退出セリ

(三) 奉天軍ニ惡感ヲ抱ク土匪ト山西便衣隊ノ約七八百ハ四日平地泉
ヲ通過シ張化縣ヲ經テ八達嶺ノ鐵道破壞ノ目的ニテ迂回セリト
ノ情報有リ

天津、濟南へ轉電アリ度シ

昭和3 五一九〇 暗

北京 本省

五月九日前着

亞情

田中外務大臣

芳澤公使

第五八二號

張家口發本使宛電報第八號

外務大臣へ轉電アリタシ第一〇號

本七日迄濟南事件ニ關シ表面ニ現ハレタル反響ナキモ山西人ノ一部有志記者間ニハ

田中内閣ハ山東ニ出兵シテ國權ヲ侵害セリ之ハ日本ノ侵略主義ニシテ支那革命ノ成功ヲ喜ハス口實ヲ設ケテ張作霖ヲ援助シ北伐ノ妨害行動ヲ計畫セルモノナレハ喜フモノハ張作霖ノミニテ

憂フル者ハ支那國民全般ナリ

又中立穩健ナル説トシテハ

(二)張ノ中央施政一年有餘苛欲誅求ト國權喪失ノ外云フヘキナシ依
テ日本ノ識者間ニハ東亞ノ大局ハ寧ロ南方ニ同情シ統一ヲ希望
スルモ現政府ハ自己ノ運命ヲ維持セントシテ間接東三省ノ既得
權云々ニ藉口シ直接居留民保護ヲ名トナシ出兵ノ結果生シタル
濟南事件ヲ發生シ張ヲ援助セリ之軍閥内鬪ノ大失態ナリ

當地ニ於ケル民意ハ大體右ノ如キモノト見テ大差ナシ又本件ニ關
シ上海工學會等ヨリ當地ノ教育會ニ對シ日本ハ出兵後故意ニ事端
ヲ設ケテ張逆ヲ援助シ北伐ヲ妨害シ華民千名ヲ斃ス日貨抵制經濟
絶交等ノ文意ヲ含メル通電ヲ寄セタル如キハ奉天系ノ管下ナレハ
未タ何等表面ニ出現セス

昭和五 五一五七 時

北京 本省

五月八日後着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第五八六號ノ一

來京中ノ林奉天總領事（八日離京）七日有野ノ案内ニテ潘國務總

理ヲ訪問シタルカ其ノ際ノ潘ノ談話中參考トナル點左ノ通

一 今回ノ戰爭ニテ北軍ハ當初ヨリ馮玉祥討伐ヲ目的トシ其ノ他ニ

對シテハ主トシテ防戰の方針ヲ執リ來リタルカ山東軍ノ失敗ニ

依リ全局ニ影響ヲ來シタルハ遺憾ナリ元來山東軍ハ軍規訓練及

素質共ニ不良ニテ各地ニ於テ殆ト戰ハスシテ後退シタル爲比較

的善戰シタル孫傳芳軍モ之ニ引摺ラレテ退却ヲ餘儀無クセラレ

タリ

一 然レトモ京漢線方面ハ極ノチ有利ニ發展シ同方面ノ馮玉祥軍約八萬ノ中俘虜一萬三千傷亡兵二萬其ノ他チ合シ同軍ノ損失兵力約四萬ニ達スル見込ニテ充分打撃ヲ與ヘタルモノト認メラル

一 公平ナル見地ヨリ見テ馮軍ハ奉天第三、四方面軍ヨリモ強ク殊ニ敗退スルモ良ク防守ニ堪ユル長所チ有ス蔣介石軍ハ素質不良ニシテ一度敗戦セハ守備ノ力ナキコト山東軍ト大差無シ

一 自分（潘）ハ德州ヲ觀察シ昨夜歸來シタルカ同地ニチハ褚玉璞ハ山東軍ヲ集收シ何豐林ト共ニ防備ヲ進メツツアリ孫傳芳ハ禹城ニ在リテ前戦ヲ黄河ノ北岸ニ配置シ居レリ張宗昌モ尙元氣ニテ是非濟南ヲ奪回スヘシト意氣込ミ居レリ（續ク）



和議

電言

昭和五 五一五八 略

本 北京
省

五月八日後着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第五八六號ノ二

一、和議問題ニ付テハ北方ハ當初ヨリ蔣及關トハ妥協シ差支無キ意
向ナルモ共產化セル玉祥トハ和議ノ餘地無シ現ニ昨日上海商務
總會ヨリ電報ニテ南北ノ和議ヲ提議シ來リタルカ自分ハ和議差支
無キ意向ヲ回答セシメ置ケリ尤モ此ノ種提案ハ從來屢々繰返サレ
タル處ナルカ具體化セス從テ假令相談出來ルモ調印ヲ見ル迄ハ戰
争ハ依然繼續セララルヘシ云々

尙潘ハ濟南事件ニ關シ南軍ノ裏面ニ共產黨指映ノ疑アルコト蔣介



S

161530

0684

12

石ノ背後ニハ軍事委員會戰地委員會等アリテ蔣ノ命令行ハレサル
コト等ヲ述ヘ又南軍ノ行動ハ常規ヲ以テ律シ得ス從テ本件ノ發生
ニ依リ必スシモ南軍カ當分北進ヲ見合スモノトモ斷シ得サルヘレ
ト語リタル趣ナリ

右談話中ノ上海總商會來電ハ八日ノ各新聞ニ發表セラレタルカ右
ニ依レハ六日附張作霖其ノ他各將領ニ宛テタルモノニハ大要濟南
事件ノ發生ニ鑑ミ南北一致外侮ヲ防ク國難ニ處スル必要アリ速ニ
干戈ヲ收メ條文ノ主張ニ依リ國民會議ヲ召集シ國是ヲ解決スヘシ
トノ趣旨ヲ記載シアリ右ニ對シ天津商務總會ハ之ニ贊意ヲ表シ相
共ニ盡力スヘキニ付進行方法ヲ明示セラレタリトノ返電ヲ發シタ
ル由ニテ全文ヲ發表シ居レリ

上海、濟南、青島、漢口ニ轉電シ奉天、天津ニ暗送セリ

支那



昭和3 五二一八 暗

北京 本省

五月九日後着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第五九三號

張家口領事發本使宛電報

第一〇號

外務大臣へ轉電アリタシ

第一二號

濟南事件ニ關シテハ既電ノ通ナルカ當地中流以下ノ一般ハ平素奉
天兵ノ橫暴ヲ恨ミ居ルコトトテ近キ將來ニ於テ張ノ失脚ヲ期待セ
シニ拘ハラス該事件ニ依リ北伐頓挫ヲ來シタルコト並ニ多數支那

手

112

17

人ノ殺害セラレタルコトヨリ對日惡感ヲ抱キ居ルモノナルモ奉天
系ノ壓迫ヲ忍レ何等具體的ノ行動無シ若シ山西軍來ラハ此ノ徒輩
ハ國民黨ノ宣傳ニ依リ火ノ手ヲ舉ケ盛ナル排日行動ヲ爲スモノト
豫想セラル

張作霖、
和平提議

昭和五 五二五八 暗

北京 本省

五月九日後著

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第五九六號

往電第五八六號ニ關シ

五月九日伊國代理公使ハ本使ニ對シ最モ信憑スヘキ筋ヨリノ聞込

トシテ北京々府閣員中數名ハ八日張作霖ニ對シ此ノ際南方側トノ

和平提議 策トスル趣旨ノ申請書ヲ提出シタルカ羅文幹ハ其ノ

發頭人 人ナル趣内話セシカタ方佛國「シヤイエ」書記官同代

理公佈 仰ニ依リ天羽ヲ來訪シ張作霖ハ只今南方諸將ニ和議態度

方テ電報シタリトノ情報ヲ本使ニ傳達方依頼シタル由ナリ探査中

一般

ナルモ不取敢

上海、奉天へ轉電セリ

S

161530

0689

會文人文情條通歐
計書事化報約商米

亞細亞

次官

大臣

電信課長 澤田

(分類 4.6.1.5.1-2)

昭和3 五三五四 暗

南京 本省

九日後發
五月十日後着

亞

田中外務大臣

岡本領事

第一一〇號(至急)

貴電第二二號ニ關シ

屢次往電ノ通國民政府ハ此ノ上日本トノ事端ヲ繁カラシムルハ同
政府ノ存亡ニ關ハル次第ニモアリ極力治安ノ維持ニ力メ當館護衛
ニ付テモ誠心誠意斡旋致シ居リ急ニ異變モ起ラサルヘシト信シ居
レリ乍併各團體ノ排日行動日チ追テ熾烈チ加ヘ本九日モ約六百名
ノ游行アリ總司令部ハ二十名ノ護衛兵ヲ當館ニ急派シテ萬一二備
ヘ李烈鈞ノ秘書陳銳(我士官學校出身)自動車ヲ以テ本官ヲ迎ヘ

外務省

ニ來リ本一日支地方ニ同行サレタシト申出テ本官其ノ好意ヲ謝ス
ルト共ニ職務上其ノ意ニ從ヒ難シト斷リタル程ノ次第ニテ館員ハ
又幾分不安ヲ感セサルニ非スト思考セラル而シテ軍艦側ニ於テハ
第二次ノ戰鬪益々擴大シ南軍算テ亂シテ敗北シツツアリ後方擾亂
氣遣ハルル處萬一ノ場合城内我二里ヲ隔テタル當館ノ救助ハ至難
ナルノ故ヲ以テ（軍艦ニテハ前年ノ例ニ懲リ豫メ陸戰隊上陸ヲ好
マス）再三下關迄引揚方ヲ希望シ居テ勢貴意ニ從ヒ明十日或八十
一日下關支那旅館ノ數室賃借受テ避難スヘシ

移轉前國民政府、總司令部並ニ外交部ニハ本官赴キテ誤解無キ様
説明スル積リナリ尙日本旅館實來館ハ三星洋行ノ二階ヲ借受ケテ
營業シ居リ客室モ間ニ合セノ疊式四室ニ過キス而モ是等ハ避難所

人ニ依リテ占メラレ居ルヲ以テ已ム無ク前配ノ通隣接支那宿ヲ借
受クル事トナシタル次第ナルモ室數合計約十室（小室）此ノ室代
一日約四五十弗見當ナリ御含置テ請フ

館員家族トモ十七名ノ多數ナルヲ以テ前年ノ如ク日清「ハルク」
ニ引越スハ不可能ナリ

前電ノ通轉電セリ

3

電信課長澤田

大臣

次官 楊

亞細亞

歐米

通商

條約

情報

文化

人事

文書

會計

寫送先

(161530-2)

陸軍省

昭和3 五三九二 暗

南京 十日午後
本省 五月十一日前着

亞

田中外務大臣

岡本領事

第一一二號 (至急)

國民政府ハ我對支態度ノ頗ル強硬ナルヲ感知セルト張群ヨリ報シ
來レル田中首相ノ真意トニ安心シ且共產黨ノ跳梁甚シキニ順ミ後
方秩序ノ安全維持ノ必要ト徹底的ニ排日風潮ノ取締ヲ爲スコトト
シ一切ノ游行集會ヲ禁止スルハ勿論街頭ニ貼付シアル排日「ボス
ター」ニ至ル迄全部之ヲ剝取ラシメ地方各地軍憲主權ニ對シ峻嚴
ナル命令ヲ發シテ違犯者ノ極刑ヲ命シ既ニ金陵大學生二名中央大
學生一名捕縛サレタルカ當館ニ對シテハ特ニ昨九日來高級副官ヲ

外務省

S

161530

0695

161530

派シ十數名ノ憲兵ヲ指揮シ護衛ノ任ニ當ラシメ居レリ乍併御來示
ノ次第モアリ且既ニ旅宿ノ借入レモ了シタルニ付往電第一一〇號
ノ通本十日一應下關ニ事務所ヲ移轉スル所存ナリ
前電ノ通轉電セリ

會文人文情條通歐
計書事化報約商米

亞細亞

次官

大臣

電信課長

(分類 16.1.5.1-2)

昭和3 五四〇九 暗

南京 本省

五月十一日後着

亞

田中外務大臣

岡本領事

第一一五號

往電第一一二號ニ關シ

國民政府ヨリ移轉先旅宿ニハ憲兵數名ヲ常派シテ護衛セシメ度本
官出入ニハ特ニ副官一名ヲ警衛トシテ附シ度キ旨申出アリ承諾シ
置キタルカ領事館内ニモ依然從來通り憲兵十名ヲ常駐セシメ警衛
スルコトトナレリ國民政府ニ首席李烈鈞ヲ訪ヒ一時下關移轉ノ旨
ヲ告ケタル際同人ハ「田中首相ハ日本ハ決シテ飽ク迄南軍ヲ磨滅
セントナスモノニ非ス張作霖既ニ沒落ノ運命ニ在リ南方政府ノ北

伐完成モ速カラサルヘク同政府ト提携シテ東亞ノ平和ヲ確保スル
ノ意ヲ有ス膠濟鐵道ヲ占有スルカ如キ意思ナシ云々」ト述ヘラレ
國民政府亦日本ト事端ヲ^等繁カラシムルノ愚ナルハ言ヲ俟タス將來
日本ノ指導ヲ俟ツテ統一ノ大業ヲ成シ遂ケサルヘカラス旁濟南事
變ニ付テモ譚延闓等ヲ派シテ蔣介石ト相謀リ日本ノ要求殆ト全部
ヲ容ルルコトトナセル次第ナリ
只々武裝解除ニ依リ日本側ノ保管サレ居ル武器ノ返還ヲ希望シタ
ルノミナリ北京^攻略戰ニモ日本トノ衝突ヲ避クルカ爲作戰變異津
浦線ニ依リテ北上スルヲ止メ專ラ京漢線ニ依ルコトトシタリ
要スルニ今後ハ假令^呼國奴ト^呼ハルルモ日本トノ衝突ハ絕對ニ避
クル方針ニシテ苟モ排日ガマシキ言動ハ嚴重取締リ肯カサルモノ

ハ戒嚴令ノ命スル刑罰ニ處スヘク金陵中央（東南）兩大學ニ本官
親シク隨ミ事情ヲ説明シ輕舉ヲ戒メタリ云々ト語レルニ付本官ハ
從來諸事件解決並ニ排日取締ニ關スル支那側ノ不誠意ニシテ徒ニ
權謀術策ヲ弄スルノ態度ヲ難シ今次ノ事變解決ハ坦懷ニ事實ヲ事
實トシテ民衆ニ鋪ヒス反動ヲ恐レス公正ナル解決ヲナシ以テ此ノ
際日支ノ關係ヲ根本的ニ立直スコト統一ノ大業完成上ヨリスルモ
必要ナル所以ヲ述ヘ置キタリ
前電通り轉電セリ



昭和3 五二七七 暗

天津 本宿

五月十日 前著

並

出中外務大臣

第六一號

本官發青島？宛電報第三〇號

濟南事件ノ發生ヲ機會ニ直魯聯軍ハ奉天軍ノ援兵ヲ得又貴地ノ視
勝本軍ハ我軍ノ援助ノ下ニ兩方ヨリ濟南ヲ攻襲セントハ計畫アリ
山東軍金參謀長之カ聯絡ノ爲メ過日奉天經由貴地ニ赴キタリトノ
噂當地支那人間ニ專ラナルカ右ハ金貴地行キノ事實ヲ基トシテ當
地官憲力故意ニ流布セル宣傳ナルヘシト思考セラルルモ御參考迄
外務大臣、在支公使ニ轉電セリ

加藤總領事



一 船

北平防務



電信寫

昭和3 五二六五 略

北京 本省

五月十日前着

出中外務大臣

芳澤公使

第六〇一號ノ一

往電第五六一號ニ關シ

其ノ後張作霖ノ態度ハ一先ツ落着キ兎モ角モ北京ノ現状ヲ維持ス
ル爲各戰線ヲ整理シ各線概ネ防守的攻勢ヲ執ルコトニ決定シタル
模様ナルカ諸方面ノ情報ヲ綜合スルニ

(一)京綏線方面ニテハ從來ノ通張作相ヲ總司令トシ山西北部ノ現在
陣地ヲ守備シ山西軍ノ退出ヲ防ク程度ニ止メ

(二)京漢線ニテハ戰線短縮ノ爲第三四方面軍ノ主力ヲ石家莊迄引下

一般



161530

0704

ケ京漢、正太兩線ノ聯絡指揮ヲ便ニシ防禦線ヲ三段ニ分チ第一線ヲ順德第二線ヲ石家莊第三線ヲ保定ニ置キ尙最前線ヲ沙河、臨沁關ニ配置スルコトトシ既ニ磁州及邯鄲方面ノ軍隊ハ引揚テ了シ目下各軍ヲ夫々新防禦線ニ移動シツツアル模様ナリ

③正太線ニ於テハ井徑ハ既ニ山西軍ニ奪回セラレ奉天軍ハ懷慶及平山ノ線ニ於テ山西軍ト對峙シツツアリ（續ク）



昭和3 五二六六 暗

北京 本省

五月十日前着

要

田中外務大臣

芳澤公使

第六〇一號ノ二

四大名ハ既ニ河南軍ノ手ニ歸シ居ル處同方面ニ在リタル褚玉璞軍
ハ津浦線ニ移動シ新ニ第三、四方面軍ノ一部ヲ補充スヘシトノ
説アリ

因更ニ津浦線ニ於テハ最近積極的防備ノ態度稍々顯著トナリツツ
アリテ第一線ヲ禹城附近ニ置キ孫傳芳軍及褚玉璞軍ノ一部ヲ之
ニ配備シ又德州ニハ主トシテ褚玉璞軍及褚ニ依リ改稱セラレタ
ル山東軍ヲ置キ更ニ何豐林ハ滄州ヲ根據トシ新ニ到着スヘキ旨

黒軍ヲ加ヘテ後方防務ニ當ラシムルモノノ如シ

大體ノ情勢右ノ通ナルニ加ヘ濟南事件ノ擴大ニ伴ヒ南軍ハ彼ニ北
進シ得サルヘシトノ觀測ノ下ニ當地ノ時局ハ稍々小康ノ狀態ヲ保
チ居レルカ一般ノ觀察トシテハ南軍一度北進シ來ルニ於テハ豫備
線方面ハ到底防守シ得ス結局形勢ハ急轉シ奉天ハ北京ヲ退出スヘ
シトナス者多シ

上海、漢口、青島へ轉電シ（青島ヨリ濟南へ轉電セシム）奉天、天
津、張店へ暗送セリ



張作霖
和平通電



電言寫

昭和五 五三二九 暗

東京 本百

五月十日午後

電情

出中外新大臣

第六〇二號

往電第五九六號ニ關シ

先日來張作霖ノ手許ニハ各方面ヨリ停戰請願書多數到達シ居リ一
面各部總長及張學良楊宇霆等モ停戰ヲ請告シ特ニ總文幹ハ六日對
暫同道ニテ石家莊ニ赴キ先ツ張學良及楊宇霆ノ贊成ヲ求メタル上
更ニ張作霖ヲ説キタル結果張モ結局民心ノ所向ニ順應スル爲意々
和平通電ヲ發スルコトヲ承認シ九日夕刻大要別電第六〇三號ノ通
發セラレ十日ノ各新聞ニ掲載セラレタリ尙九日夜半町野カ張ニ面

一般

芳澤公使



161530

0708

曾ノ驛候ハ該通電ニ關聯シ今後關山トハ安穩ニ得ルモ急化セム
馬玉祥及蔣介石トハ到底和平機轉ハ難シト語リタル趣ナリ
本電別電ト共ニ奉天。哈爾濱。青島。上海。南京。漢口。廣東。
張家口ハ轉電シ天津へ略送セリ
濟南へハ青島ヨリ轉電アリタシ

和平通電

電信寫

陸海參軍へ
寫送付済

昭和3 五三三〇 略

北京 本省

五月十日發着

聖

田中外務大臣

芳澤公使

第六〇三號

(別電)

赤禍國ヲ災シテ以來戰亂相次キ東南各省屢々慘禍ヲ蒙ル作霖舉兵ノ目的ハ共產討伐ニ在リ志ヲ同シウスルモノハ敵ト雖モ之ヲ友トス我軍ノ向フ所規律ヲ嚴ニシテ民ヲ護リ外人生命財產ノ保護ニ力メタリ蓋シ内亂カ外交ニ累ヲ及ホサンコトヲ悞ルルカ爲ナリ然ルニ近年廣東、漢口、南京、山東各地ニ於テ國際間ノ不祥事件續發シ國內政見ノ相違ノ爲事終ニ外人ニ波及スルニ至レリ此ノ極度放任

新
五
三
三
〇

スルニ於テハ獨リ國家ヲ全ウシ得サルノミナラス延イテ支那ニ對
スルノ途ヲ失フノ悞アリ作霖茲ニ鑑ミル處アリ特ニ彰德正太方面
戰勝ノ軍隊ハ攻撃ヲ停止セシム國內政治問題ハ一ニ國民ノ公正ナ
ル裁決ニ待チ斷シテ無意義ノ主張ヲ爲サス是非共ニ之ヲ輿論ニ聽
カントス作霖久シク東三省ニ在リ具ニ共產ノ禍害ヲ經驗セリ故ニ
赤化ヲ防キ外交ヲ慎重ニスルヲ以テ自立ノ唯一基礎トス今ヤ戰亂
未タ收マラス國家ノ將來愈々危カラントス願ハクハ邦人君子相共
ニ覺醒シ國家危急ヲ救ハレンコトヲ希望シテ已マス

電信寫

五 四 三 三 略

北京
本署
五月十一日發着

中外務大臣

芳澤公使

第六一〇號

張家口發本使宛電報

第一二號

大臣へ轉電アリタシ

第一七號

濟南事件及其ノ後山東出兵邦軍ノ晉北擾亂等ノ誤解ヨリ山西軍ノ
當地ニ來ル場合ハ同軍内部ニ國民黨ノ勢力ヲ張り居ル關係ヨリ昨
年五月到着ノ時トハ大ニ事情異ナルモノト豫測シ當地居留邦人婦



161530

0712



女子ハ北京或ハ天津ニ一時引揚テ適當ト認メタルニ付八日居留民
一般ニ對シ任意ノ行動ヲ取ルヘク訓示ヲ與ヘ勸告シ置キタリ又婦
女子ノ大部分ヲ占ムル當館ニ對シテハ公務遂行上右ニ關シ一層考
慮スヘキコトヲモ重ネテ注意ヲ與ヘ置キタリ

昭和3 五四七三 暗

天津 本省

五月十二日前着

重

田中外務大臣

加藤總領事

第六五號

五月十一日王揖唐白井へノ内話

一 濟南事件善後措置へ日支兩國間ノ最モ困難ナル問題ト思ヘルル
處日本軍へ此ノ際支那南北政府及人民ヲ敵トスルモノニ非
テ人道ニ反シテ在留民ニ危害ヲ加フル亂兵ヲ肅懲スルニ止マル
コトヲ廣ク宣布スルト共ニ其ノ範圍内ニ於テノミ行動スヘク諸
軍全體ヲ敵トスルカ如キコト無カラムコトヲ希望ス

一 日本ト張作霖トノ最近ノ關係ヲ詳カニ承知セサルモ内外南北共

一般

12

ニ信用無キ張作霖ヲ速ニ現地位ヨリ去ラシムルコトハ時局收斂
唯一ノ策ナルカ日本ヨリ此ノ際張ニ右勸告ヲナシ張ヲ早キニ及
ンテ關外ニ去ラシムルカ如キコトトモナラヘ日本ノ公正ナル態
度愈明カトナラム

張ヲ去ラシメタル後ニ於ケル北方政局ハ一時間錦山ヲ中心タラ
シメテ一先ツ安定セシムル要アリ馮玉祥ヲ迎フルコトハ紛糾ヲ
招クモノナリ一部ニ於ニハ此ノ際段祺瑞ヲ推サムト目論見居ル
者アル由ナルカ自分ハ時期尙早トシテ是等ノ計畫ニ賛成セス老
段自身モ今直ニ出陣ノ希望ヲ有シ居ラサルカ如シ是張作霖ノ如
キ後ニ直ニ乗込ムコトハ身ヲ潔クスル所以ニ非サレハナリ
張作霖ノ時局通電ニ對シ段トシテ響應スル通電ヲ發スル様張側

ヨリ盛ニ運動シ居ルニ付何等カ意思表示ヲナササルヘカラサル
コトト思ヘルモ未タ決定シ居ラス通電ヲ發スルニシテモ其ノ
辭句中ニハ苟モ日本ニ當ルカ如キ意味ヲ加ヘサルヘキコト勿論
ナリ

附記

王ノ内話右ノ如キニ拘ラス段派ハ豫テヨリ山西側並ニ廣西、四
川諸省トノ聯絡ヲ策シ居リシ事實アレハ今後ノ政府ニ對シ相當
活動ヲ開始スルモノト觀測セラル

在支公使、奉天、上海、青島ニ轉電セリ

昭和3 五六七五 暗

北京
本省

五月十四日 後着

田中外務大臣

第六二六號

張家口發本使宛電報

第一三號

大臣へ轉電アリタシ

第一四號

張景惠ハ大同ニテ山西ト妥協交渉中ナル模様ナルモ成立シ難キ見
込大同ニ集中セル奉天軍ハ十二日夜分ヨリ汽車輸送ヲ開始シ下花
園方面ニ向フモノノ如ク觀測セラレ一般支那人ノ對日感情徐々ニ

惡化ノ傾向アリ

芳澤公使

亞



此支

昭和3 五七一三 略

北京 本館

五月十四日後着

亞

出中外務大臣

第六二八號

張家口發本官宛電報

第一六號

外務大臣へ轉電アリタシ

第一九號

拙電第一〇號ニ關シ

奉天軍ハ大同ヨリ徐々ニ引揚ケニ着手シタルモノノ如ク十二日夕
刻以來毎日數列車ニテ富地ヲ通過東行ス

も

PLA

芳澤公使



子



尾

電信寫

S

161530

0738

電信寫

此支

昭和五 五七二 暗

北京 本省 五月十四日 後着

田中外務大臣

第六三八號 (至急)

張家口發本使宛電報

第一七號

大臣へ轉電アリタシ

第二〇號 (至急)

當地ニ於ケル對日惡感狀況ハ屢々電報セル通ナルカ其ノ後益々深刻ニシテ中流以下ノ社會ハ濟南事件ヲ日支戰爭ナリト誤傳シ當地在留ノ日本人ニ對シテハ俄ニ洋鬼子呼ハハリヲ爲シ奉軍撤退ト共

芳澤公使

Plak

7



161530

0739



ニ殺害スヘシトノ傳說速ク郊外地方迄擴カリ反率土匪團體盛ニ之
ヲ宣傳シ居ル情報盛ナリ唯現在之カ公ニ宣傳セラレサルハ一ニ率
天軍ノ取締嚴重ナルカ爲ナリト確信ス依テ館員婦女子ハ明十五日
午前二時發ノ汽車ニテ先ヅ北京ニ旅行セシムルコトトシタリ
右ノ次第ニ付今後ノ狀況如何ニ依リテハ審判其ノ他ヲ適宜ニ處分
シ領事館モ北京迄警備スルヲ適當ト認メラル

支那支局

昭和三年五月廿四日

機密第五七五號

昭和三年五月十四日

在支那

特命全權公使 芳澤



外務大臣男爵 田中義一殿

北軍濟南敗退後ニ於ケル當方面一般情況

報告ノ件

客月三十日北軍ノ濟南撤退ニ伴ヒ當方面ハ一般ニ俄ニ不安ヲ感スルニ至リ之カ爲奉天、天津方面ニ避難者續出シ又銀行ノ取付等モ行ハレツツアル處最近ニ於ケル概況左ノ通
一、本月初ヨリ京奉鐵道ニ依リ奉天、天津方面ヘノ避難者夥シキ數ニ

在支那日本公使館

S

161530

0745

上リ殊ニ午後八時十分發ノ列車ハ軍人家族ノ無賃乗車券有效ナル
爲混雜ヲ極メタルカ其後濟南事件勃發シ南軍ノ進出遲緩ナル爲幾
分緩和セルモ奉天派要人家族ノ引揚等續々行ハレツツアリ
一北軍ノ敗退ハ金融方面ニモ影響ヲ及ホシ基礎薄弱ナルカ若クハ政
府ト密接ナル關係アリト思惟セラル銀行等相當ノ打撃ヲ受ケ居レ
リ即當地中國銀業銀行及邊業銀行發行ノ兌換券ハ本月初ヨリ流通
圓滑ヲ缺キタルカ次テ中國絲茶銀行、勸業銀行ハ本月五日頃ヨリ
緩漫ナル取付ニ遇ヒ殊ニ八日勸業銀行ハ數百名ノ兌換要求者殺到
スルニ及ビ銀行側ハ不得已一人三十元ヲ限度トシテ兌換ニ應シタ
ルカ其後兌換要求依然止マサル爲遂ニ一人ニ付兌換額ヲ十元ニ制
限シタル趣ナリ又中國絲茶銀行ハ其後一時平靜ニ歸シタルモ十日
突如休業スルニ至レリ其他二三銀行業者ノ取付ヲ傳ヘラレタルモ
差シタルコトナカリシ模様ナルカ時局ノ進展ニ伴ヒ尙動搖ハ免レ
サルモノト認メラル

右何等御參考迄報告ス

秘

(分頁 161530-2)

昭和3 五九六一

天津 本省

五月十七日後着

亞

田中外務大臣

加藤總領事

第七八號

五月十七日段祺瑞ノ本官ニ對スル時局談左ノ通

一 張作霖ハ北京退出ノ時機ヲ失シ今ヤ力ニ押サレテ退出ヲ餘儀ナクサレタル形ナルニ付最早中央ノ政局ヲ平和裡ニ收拾スルノ見込無キニ至レリ

ニ 蔣介石ニシテ若シ京津方面ニ進出シ來ランカ李宗仁等ノ廣西派ノ離反、劉湘ヲ首席トシ周西成ヲ副首席トスル四川貴州雲南諸將ノ團結ノ壓迫ニ依リ南京ニ於ケル現在ノ地位ヲ保持シ得サル

一般

S

161530

0767

ニ至ルヘキヲ以テ蔣軍北進ヲ續クルモノトスルモ中央ノ大局ハ結局閻馮ノ兩人ニ依リ收拾サル事トナルヘシ併シ馮ハ信望足ラス國家ノ政務ヲ處理シ得ル人物ニ非サルヲ以テ北方ハ結局ハ閻錫山ヲ中心トスルニ至ルヘキカ

馮閻間ノ關係圓滑ヲ缺キ第二ノ紛糾ヲ見タルカ如キ場合ニ於テモ張作霖ハ最早再ヒ中央ニ進出スル事ハ先ツ不可能ト見ルヘキナリ

四 南京北伐軍ハ濟南事件ニ依リ立證サレタル通素質不良ニシテ若シ京津地方ニ來ルヲ許サハ如何ナル不祥事ノ再發スル無キヤ保シ難ク日本ノ出兵ノ理由タル居留民保護モ出來難クナル事故日本側ニ於テ同軍ノ北進ヲ阻止サル方適當ナラスヤト思考ス
此時同收拾ノ見込立タハ自分ハ何時ニテモ出陣ノ用意有リ

在支公使、奉天、青島、上海、南京へ轉電セリ

昭和3 六二四九 暗

北京 本省 五月廿一日後着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第七〇五號ノ一(極秘)

十九日熊希齡力有野ニ爲シタル談話中參考トナル點左ノ通

一 奉天派ハ大體ニ於テ現狀維持ノ見込無クモノト自覺シ北京引揚
テ決心シ居ル模様ナルモ最後ノ一戰ヲ交ヘ敵ニ一撃ヲ加ヘ以テ
所屬軍隊ノ引揚ヲ有利ナラシメントスルモノノ如シ若シ奉天側
カ所屬軍隊全部ヲ完全ニ關外ニ引揚ケシメントスルニハ悠ニ二
ヶ月ノ日子ヲ要スヘシ

一 張作霖ハ目下閭錫山ト妥協セントシ何港ヲ山西ニ向ヘシメタル

モ（往電第六四八號參照）何ハ戰線ノ突破出來サル爲正定ヨリ
引返シ來レリ元來聞及蔣介石ハ表面的ニ奉天派ニ對シ妥協ノ意
ヲ表示シ得サルモ内心ニ於テハ確カニ妥協ノ意思アリ又奉天派
一部ノ勢力ヲ保存スル事ニ付テモ異議無キモノ如シ

奉天派中楊宇霆張學良等新派ノ連中ハ蔣介石トノ間ニ程度ノ
聯絡ヲ保チ居ル模様ニテ現ニ先般來京シタル滙豐銀行上海支店
ノ陳介ノ談ニ依レハ南京政府ニ於テ確定シ居ル順直（北京方面）
政務委員會ノ名簿ニハ委員十名ノ内楊宇霆及張學良初ノ奉天系
ノ委員五名ヲ列記シ居ル由ナリ

（續ク）

極秘

昭和3

六二四七

略

北京

本省

五月廿一日後着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第七〇五號ノ二（極秘）

一部方面ニテハ先年目分等ニ於テ組織シタル北京治安維持會
ノモノヲ組織シ張作霖引揚ノ場合ノ治安維持ヲ擔當セシムヘシ
トノ提議ヲ爲スモノ有ル處今同ハ前同ト事情ヲ異ニシ殊ニ政府
側ヨリ何等此ノ種ノ相談無キ今日之カ協議等ヲ爲スニ於テハ張
ノ面目ヲ傷クル虞モ有ルニ付今日迄ノ處何等ノ相談ヲ爲シタル
事無シ

停戰及和平ヲ促進スル爲此ノ際外交團又ハ日英米佛等數個國ニ

電信寫

S

161530

0808

各方面實力者ニ對シ勸告セラレン事ヲ希望ス尤モ右勸告ハ友
誼的ニシテ且内政干涉ニ亙ラサル様注意シ同時ニ各國武官等ニ
於テ敵味方双方ノ意思ノ疏通ヲ圖ラシムルニ於テハ效果有ルヘ
シト信ス只一國單獨ノ調停ニテハ效力有ルヤ否ヤ疑問ナリ

上海、奉天へ轉電シ天津へ暗送セリ

(終り)



昭和3 六三一〇 略

南京
本省

五月廿二日前着

亞

田中外務大臣

岡本領事



第一三八號

二十一日王交通部長ノ時局談左ノ通

一北京陥落後馮玉祥ト蔣介石或ハ閻錫山トノ間ニ軋轢生スヘシト

ハ何人モ懸念スル處ニシテ馮玉祥ノ人物ニ就テハ自分亦全然信

賴シ得ス乍併蔣介石、閻錫山、李濟(李宗仁ト共ニ)馮玉祥

四巨頭中前三者ハ完全ニ意思疏通シ居リ李宗仁カ武漢ニ於テ蔣

ニ反對ノ態度ニ出ツルカ如キコトハ絕對ニ無キヲ以テ馮玉祥不

逞ノ舉ニ出ツル場合右三者結合シ之ニ當ラハ毫モ恐ルルニ足ラ

ス南京政府ニ於テ馮派多數ヲ占ムルカ如キ觀テ早レ居ルモ事實
馮ヲ代表シ居ル者ハ內政部長薛篤弼及熊斌ノミ張之江ノ如キハ
本來馮ノ下ニ居ルヲ得スシテ當地ニ逃レ來レル者ナリ李烈鈞ハ
從來ノ關係上幾分好意ヲ有スルカ如キモ本來馮玉祥ヲ指導スル
カ如キ態度ニ出テ居ル次第ナルヲ以テ北伐完成全國統一ニ支障
アリトセハ馮ニ反對スヘキハ當然ナリ

中央政府所在地ニ就テハ總理ノ遺志ニ依リ南京ト定ムヘシト主
張スル者多キモ當地ハ何等ノ設備無ク且對外關係ニ於テモ適當
リ北京ヲ首都ト爲スヲ得策ト思考シ居リ自分等同志ニ於テハ之
ヲ主張スル考無ク而シテ地勢上、政略上等南京ハ將來ノ首都ト
シテ適當ト思考スルニ付徐ニ諸般ノ施設ヲ爲シ移轉スルヲ可ト

ス

一 濟南事件ニ關スル日本ノ要求ニ就テハ一同甚タ危惧ノ念ヲ抱キ
居リ日本ニ於テ領土的野心ヲ有セサルハ確信スル處ナルモ膠濟
鐵道ニ付何等ノ要求ヲ提出サルルニ非スヤト懸念シ居レリ同鐵
道局長ニハ日本側ニ好評アル路政司長趙世瑢ヲ任命セシ次第ナ
リト語レルニ付本官ハ日本ニ於テ領土的野心ヲ有セサルハ果ス
聲明セシ通ニシテ膠濟鐵道ニ對シテモ日支間山東細目取極ニ基
ク要望以外何等求ムル處無シト信スト答ヘ置ケリ

公使、天津、濟南、青島、上海、漢口ニ轉電セリ

上海ヨリ廣東ヘ轉電ヲ請フ

外務省

支那新聞

五月三日

第一號甲

昭和四年五月廿四日發

秋

陸同文

電報

次長宛

在支那公使館附武官

五月三日

五月三日午後六時三十分發
午後七時十分着

文第三三二号

保定謀者報

一本三十一日朝八時頃南方軍ノ飛行機三台保定

上空ニ飛来シ停車場ニ對シ爆彈七八個ヲ

投下シタルモ被害無シ

馮軍ハ從來飛飛機ノ活動ヲ見サリテ故或ハ

山西軍ノモカトモ思ハル

二完縣ハ一時奉天軍ニ奪回サレシ如ク傳ヘラレシカ

事實上山西軍ノ手中ニ在リト云フ

612.0050

8

161530

0813

寫

調査書
原書A.1.1.0.2
清南事件出典不係

(分類 A.6.1.5. 1-2)

昭和3 六五九一 略

香港 本省

五月廿五日 後著

照

田中外務大臣

村上總領事

第四二號

當地「ボースト」ハ廿五日滿洲ニ於ケル日本ト關シ烟陸軍次官ノ聲
明ハ懸念ノ向ヲ安心セシムルニ足り又在支外人ノ保護ヲ支那ニ委ネ
難キ事實ト在滿日本ノ利益カ日本國富ノ一割ニ達シ日本カ其ノ安全
ノ爲適切豫防手段ヲ講スル所以トハ良ク瞭解スル所ナルカ其ノ方法
如何ニ依リテハ兩軍ノ進出ヲ阻止シ滿洲ヲ支那ト別個ノ地位ニ置キ
支那ノ統一ヲ妨ケ兩軍ノ反感ヲ刺戟スルニ終ル虞ナキニアラス英外
相カ議會ニ於テ統一セル支那ヲ見ルヲ望ム旨答辯セルハ日本ニ對シ

記錄件名
國軍命令書
北支關係

外務省

爲ニ支那ノ分裂ヲ長引カシメサル様注意ヲ促セルモノト解スヘク日
本トシテハ張作霖失脚ノ場合北京政府ヲシテ滿洲ヲ事實支那ノ一部
ナリト認メシムル措置ヲ取ル必要アラント論シ尙英ノ上海派兵租界
内ニ止マレリトテ我出兵ト異ナル所以ヲ辯シ居レリ右ハ在支一部ノ
人ノ危惧ヲ語ルモノト認メラルルニ付爲念
北京ニ轉電シ上海ニ暗送セリ

電信寫

赤峰

(466522)

昭和3 六五八一 晴

奉天 本署

五月廿五日後著

亞

田中外務大臣

林總領事

第二四二號

赤峰發本官宛電報

第七號

本官發大臣宛電報

第七號

(一)當地駐劄第十七旅長ハ數日前北京ヨリ歸任セルカ赤峰及國城ニ
アル同旅ノ兵ハ八ヶ月ニ亘ル給料ノ不渡ニ依リ上官ノ命令行ハ
レス形勢ニ依リテハ兵變ヲ起シ奉天出身ノ同旅長ヲ驅逐スヘシ

トノ世評アリ

(二)熱河ノ軍費強制賦課ハ期限ニ近付ケルモ殆ト納金者ナク當地商務會モ其ノ負擔額ノ即時納付ニ應セス官憲トノ接衝既ニ行駐リ縣知事ハ軍隊側ノ懲懲モアリ二十二日商務會ノ重要分子タル各組合代表ヲ拘留セリ。

(三)地方官民ノ不安漸ク増大シ家族ヲ安全地方ニ移スモノ多シ當地交渉署長ノ如キ取急キ辭表ヲ提出スヘキ旨本官ニ内話セリ

(四)天津方面ヘノ爲替ハ二十日以來取引セラレス中國交通兩銀行等ノ紙幣ハ流通不能トナリ物價漸次騰貴シ騰レリ

(五)通遼方面ヘノ引揚ハ一時道路ノ困難ヲ恐レ見合セニ決セルモ引揚者中病人アル爲錦州方面困難ノ場合ヲ慮リ尙途中休息ヲ要ス

ル關係上通送ヨリノ自動車派遣ヲ再ヒ鄭家頼ニ請求セリ

内既ニ切迫シツアル交通狀態ニ鑑ミ且途中保釋ノ必要上已ムヲ
得ス當館モ在留民ト同時ニ撤退スルコトニ決シ當館及居留民ノ
遺留財産ニ就テハ本官ニ於テ支那側ト其ノ保釋方ヲ折衝中ナリ
自然出發ハ二十七、八日頃トナルヘシ

大臣へ轉電アリタシ

北京、鄭家頼へ轉電セリ



山東

電信寫

昭和3 六五四九 略

本省 濟南

五月廿五日 前着

亞

田中外務大臣

西田總領事代理

第二七八號

南軍ノ滄州進出行儀ノ情報アル處萬一ニモ南軍カ滄州ニ戰敗セ
 ハ其ノ損害ノ程度ニモ依リ且京漢線方面ノ奉天軍保定附近保持ノ
 戰況如何ニ依ル事乍ラ南軍ハ德州ニ踏ミ止マル事困難ヲ來スヘキ
 事態ヲ生セハ是迄南軍ノ北進ハ僅カニ士氣ノ優レルト便衣隊カ北
 軍ノ後路ニ活躍セルトノ二點ニシテ既ニ非常ナル疲勞ヲ來シ彈藥
 ノ補給困難食物ノ異ナル等ニ難澁シ居ル狀態ナルニ加ヘ德州ヲ守
 リ得サレハ濟南及膠州鐵道ニハ近ツクヘカラス結局區域及濟寧方



161530

0843

面ニ後退スルノ外無キ處數萬ノ軍隊ヲ收容シ之ヲ休養スル事ハ後
方トノ聯絡遠ク且不充分ナル南軍ニ取リテハ頗ル難事ニシテ或ハ
昨年六月ノ第一次北伐同様否之ニ數倍スル打擊ヲ受ケ若シ最近青
島方面ニ活躍ノ情勢ニアル劉志陸及張宗昌ノ殘部隊カ海州徐州方
面ニ直進セハ南軍ノ北進部隊ハ全滅スルノ運命ニ陷ル懸念有リ且
又李宗仁等廣西派カ程潛ヲ押ヘ湖南ノ不安ヲ一掃セハ蔣介石ニ對
スル諒テノ不潔（目下李宗仁ハ表面上蔣ニ服從シ居レルモノハ直
ニ表面ニ現ハレテ南京進出ヲ圖ル情勢ヲ來スハ極メテ當然ノ順序
ナルモノノ如ク蔣ニ孫傳芳ノ如キモ從來屢々馮玉祥蔣介石ニ反對
セルモノ李宗仁等ノ廣西派トハ略ニ聯絡有ル事ヲ内話セルニ鑑ミ蔣
介石ノ運命ハ今回ノ徐州方面ノ戰況ニ支配セラルルモノト觀斷ス

ルハ但チ懸望ニ過クルモノトハ云フヘカラス

本官ハ右情勢ノ必無ヲ保セストシテ軍司令部トモ打合セ斯ル場合
ノ邦人保護ニハ萬遺算無キヲ期シ居ル處他面北軍カ膠濟鐵道沿線
ニ出勤シ來ル場合ニ北軍ニ對シテ直ニ其ノ入境ヲ差許ス事トセハ
戦場ノ餘憤ヲ排日ニ轉シテ再ヒ人氣政策ヲ執リ南方ノ勢力維持ニ
努メ日本ノ張作霖援助ヲ高調シ北軍戰勝スルモ遽ク南下ハ出來ス
山東カ永ク禍亂ノ巷トナリ膠濟鐵道ノ交通モ頗ル危フマレ山東邦
人ノ經濟的地位ノ到底望ミ難キニ至ルヘキニ依リ萬一南軍ノ敗兵
カ當地ニ流レ來ル場合ハ其ノ機會ニ於テ我軍ノ膠濟鐵道沿線ノ警
備ヲ擴大シ北軍モ沿線廿支里外ニ撤退セシメテ事實上膠濟鐵道及
其ノ沿線ヲ南北兩軍ニ屬セサル臨時獨立自由地帶ヲ構成スル様ニ

誘致シ政治的獨占的批難ヲ避ケテ經濟的實力ヲ保持シ濟南事件及
南京事件ノ解決ヲ有利ニ導ク事國際ノ現狀ニモ鑑ミ必要ナル事ト
思料セラル卑見御參考迄

在支公使、青島、上海、漢口へ轉電セリ

編者附言
原書ハA. 1. 1. 0. 2. 1. 2.
南支那事件 敵手不傳

寫

(分類 小. 6. 1. 5. 1-2)

昭和 六六六七 時

香港 本書

五月廿六日 後著

田中外務大臣

村上總領事

第四三號

往電第四二號ニ關シ

「プレス」ハ二十六日支那ニ於ケル各國ノ方針ト關シ英外相ノ嚴正
中立ヲ贊シ其ノ「ケンウオージー」ノ説ヲ簡單ナリトスル點ハ多數
英人ノ同感スル所ナリト説キタル上日本ノ濟南ニ於ケル措置ハ英直
的支那兵ノ暴行ニ依リ餘儀ナクセラレタルモノヲ示テ爾等追テ英兵
スヘキハ既ニ聲明セラレ居リ又南北兩軍ノ策戰ニ未タ支障ヲ與ヘタ
リト認ムヘキモノ無キニ値ミルモ其ノ利害特ニ深キ滿洲ニ關スル點
明ハ其ニ實實ナルモノト斷フヘタ之ヲ以テ直ニ他國スルハ當ラズ南

外務省

國民革命軍北伐關係



161530

0852

軍之ニ異議ヲ唱フヘキ理由無ク假作義又左シテ之ニ反對セサル此ノ
際他國ヨリ干涉スヘキ理アラストテ我國度ヲ是認シ又米國公使ノ天
津ニ關スル覺書ハ尤ナルモ支那カ今尙渾沌ノ境ヲ脱セサルハ一ニ應
順ナル部隊ノミヲ用ヒ得サル電ナラスヤト懸念シ居レリ有ハ當地政
廳筋及多數英人ノ觀察ヲ語ルモノト認メラルルニ付電念
在支公使、ニ轉電シ上海ニ暗送セリ



好支

昭和 六 七 六 五 暗

天津 本省

五月廿八日後着

亞

出中外務大臣

加藤總領事

第九九號

馮玉祥代表丁春膏、林正則二十八日來訪馮ヨリ五月一日附本官

宛書面ヲ附シタルカ其ノ内容ハ馮軍ハ各國在留民保護ノ職責ヲ

盡シ關係法規慣例ヲ尊重スヘシト云フ以外別段ノ事無シト云フ

ニアリ

尙同様ノ書面ヲ芳澤公使ヲ初メ各國公使並天津各國總領事司令

官ニモ送達セル趣ナリ

ニ之ヨリ先五月二十七日丁春膏ノ白井ニ爲シタル内話ニ依レハ馮

電信寫

玉祥軍ノ主力ハ今ヤ博野、高陽、任邱方面ニ向テ進軍シツツアリ高陽ヲ占領スルニ至ラハ保定ハ支ヘ得サルヘク任邱、大城ニ進出スレハ馬廠ノ線危險ニ瀕スヘシ天津ニ於ケル各方面ノ代表ト稱スル連中ヨリ屢々會商ヲ申込マルルモ程好ク應接シツツアリテ未タ何レノ方面トモ具體的ニ共同動作爲シ居ラス張壁ホウカイ等南京政府代表中ニモ統一ヲ缺キ居リ自分ノ階ニ落チサル點アレハ自分ハ先ツ外交的ニ各方面ノ統一ヲ希望シ居レリ李廷玉一派ハ天津總商會其ノ他土地ノ名望家ト共ニ臨時治安維持會ノ組織ヲ策シ居リ自分モ其ノ相談ヲ受ケ賛意ヲ表シ置キタルモ自分又ハ馮派ノ名ヲ以テ便衣隊組織ノ計畫ヲ爲シツツアリトノ風評ハ事實ニ非ス

亞細亞局

昭和三年六月四日 接受

機密 第三二二號

昭和三年五月二十八日

在天津

總領事 加藤 外



外務大臣男爵 田中 義一 殿

姚震時局談報告ノ件

五月二十七日姚震ノ白井副領事ニナシタル時局ニ關スル内話要領御
參考迄左ノ通報告ス

一 張作霖ニシテ速カニ撤退スレハ南京政府決定ノ通山西軍京津地方
ニ入り同地方治安亂ルルコトナカルヘキハ勿論聞錫山ト段祺瑞ト

在天津日本總領事館

S

161530

0868

ノ關係ニ顧ミ段ノ出處ヲ易カラシメ北方政局ハ比較的早ク安定ス
ルニ至ルヘキモ之ニ反シ馮軍來ルニ於テハ赤露ノ勢力ハ本國ヨリ
直チニ北支ヲ經テ日本ヲ脅スニ至ルヘク兩國ノ危險此上ナカルヘ
シ

ニ馮軍ノ入京ヲ防クニハ各國軍特ニ日本軍ノ力ニ待ツ外ナシ日本軍
ニ於テ京津一帶ニ何レノ軍ヲモ入ラシメサルノ態度ヲサヘ示サハ
馮ハ日本軍トノ衝突ヲ覺悟シテ迄軍ヲ進ムルモノニ非スソレニハ
日本軍カ北京天津ニ各一個旅團位ノ兵ヲ用意シ京津不可侵ノ警告
ヲ發スレハ足ラン

ニ張作霖出關後ノ京津治安維持ニ付テハ奉天派ト段派トノ間ニ内密
ノ相談モ進ミ居リ段派カ其衝ニ當ルコトトナルヘキモ段ハ直チニ

入京セス北京ニハ不取敢代表ヲ派シテ警察其他ト連絡シ治安維持
ニ當リ其内各方面ヨリノ勸告アルヲ待チ徐ロニ出處スルナラン
白崇禧軍ノ北上ハ表面北伐參加ト稱シツツアルモ或ハ馮ニ備フル
李宗仁ノ策ナルヤモ知レス程潛ヲ處分シタルハ馮ト程トノ間ニ武
漢占領ノ陰謀アリタルコト發覺セルカ爲ナリトモ傳ヘラレツツア
レハ廣西派ハ既ニ今後ノ戰局ニ對シ豫メ準備ヲ開始セルモノニ非
サルカ

因ニ王揖唐、吳光新等ハ姚力段祺瑞擁戴ヲ餘リ露骨ニ又盛ニ運動シ
ツツアルヲ段ノ爲メナラストテ面白ク思ハス二十七日姚ニ注意意見
スル所アリタル由ナルカ段ノ眞意トシテハ往電第七八號五ノ通各方
面ヨリノ推戴アリ國家ノ爲其出處ヲ必要トスル時期ニ至ル迄ハ自重

スルモノト観測セラル

本信寫送付先 在支公使、在奉天、上海、青島各總領事

電信寫

此支



昭和3 六九九五 暗

北京 本省

五月卅一日後著

亞

田中外務大臣

第七七五號ノ一

往電第七七二號ニ關シ

二十九日、三十日及三十一日ノ三回張作霖及潘復ト會見シタル江

藤ノ内報要領左ノ通

一二十九日午後十二時張作霖ヲ訪問シタルニ何時ニ無ク不氣嫌ニ

テ孫傳芳、楊宇霆及張學良等ハ過日來保定ニテ會議中ナリシカ

本日電報ニテ兵ヲ保定西北ノ山地ヨリ易水河ノ手前ナル琉璃河

ニ引下ケントスル由報告シ來リタルカ作戰上甚タ解シ難キニ付

芳澤公使

Ph

直ニ三人ニ對シ招電ヲ發シ置キタリト。會談中モ關係員ヲ呼ヒ返電ナキヤト催促シタル方間モ無ク三人ヨリ三十日午前六時入京スル旨ノ返電來レリ。

同夜張ノ談ニ依レハ三、四軍ハ京漢線ヲ換シテ保定ノ東部方面ニテ馮玉祥軍ト西部方面ニハ閻錫山軍ト對抗シ居タル筈ナルカ張ハ始終強氣ニテ三將ノ退却作戰ヲ屬側シ居リシモ三十日午後二時會見ノ際ハ多少和ラキ更ニ同夜十二時訪問ノ際ニハ打解ケテ龍霍等始メ三十一日午後張カ首席公使ト會見後張ニ會ヒタル時ハ奉天軍ノ保定退却ハ保定ノ西北部ヨリ閻錫山軍カ現ハレ奉天軍ノ背後ヲ衝キタル爲ナルカ自分（張）ハ學良及楊宇霆等ニ對シテハ保定保定ヲ維持スヘシ若シ退却スル位ナラハラカカ退却ヘシト叱咤シタル次第ナルモ學良、楊宇霆等ハ琉璃河ニテ

一戰ヲ試ムヘシト誓約シ居ルカ故ニ（續ク）

至急

秘

昭和三年五月三十一日

電報

陸軍次官宛

支二五三

一、今三十日朝保定ヨリ歸來セシ趙欣

伯ノ松井顧問ニ語リシ所ニ依レハ本日

張、楊等ノ保定引揚ト同時ニ軍

團司令部ノ風呂桶マヲ積ミ輸送シ

末レリトコトニテ軍團司令部ハ保

定引揚ヲ終リシコトハ確實ナリ引

揚地莫ハ明カナラサルモ琉璃河トノ

説高シ尙右ノ事實ハ京漢鐵道局

五月三十日午後八時三十分
北京公使館附武官

員ノ言トモ一致シアリ本日ノトル少
タアレ電報ハ奉天軍ノ保定撤退
ヲ傳ヘタルモ市中何等ノ變化ナレ
ニ張作霖ノ北京引揚ハ既ニ時間ノ間
題ト云フ可ク退却動機如何ニ依
リ多少ノ遲延ハアルモ或ハ急轉直下
的ニ引揚クルヤモ計ラレス目下至嚴
ノ注意ヲ拂ヒアリ
三、北京ノ治安維持ニ就テハ既電ノ
通ナルカ國民黨ノ計畫畫セル順直
治安維持會ト協定セシ所ニ依
リ都合ヨク行クハ居留民ハ交民巷
ニ避難シ財産ハ治安維持會ノ手

依リ保護ニ得ルノ見込ナキニ非
 ス委細後報ス



此支

秘

海軍次官
軍令部長

三浦

機密ニ付電

第三遣外艦隊司令官宛

本隊自河交通線警衛方針要領左ノ如シ
一支那敗兵又ハ土匪カ航路ヲ脅威スル場合

天津ニ一隻、塘沽ニ一隻ヲ配備シ情況ニヨリ定

期船ニ武装兵ヲ搭乗セシム

ニ稍々優勢ナル兵力カ偶發的ニ航路ヲ脅威スル
場合

天津ニ一隻、塘沽ニ二隻並ニ減潮時ニ控テ固執

S

161530

0902

三、秋、中、同、一、夏、の、配、備、の、定、期、形、二、常、二、
武、装、兵、の、操、業、を、シ、ム

三、正、規、軍、の、正、戦

臨、戦、指、令、ス

四、通、信、達、路、情、報、蒐、集、の、主、ト、シ、テ、天、津、在、泊、艦

控、任、ス

詳、細、書、類、ニ、テ

三十日

4
2

秘

三五三一
后九一五
原着

(天津)第九驅逐隊司令

海軍次官
軍令部次長

機密 第二六番電

第二遣外艦隊司令官宛

軍司令官ノ談ニ依レバ京漢線方面ハ既ニ
総退去命令ヲ下セシモノノ如ク津浦鉄
道方面主力ハ退却掩護ノ為斷口ヲ南
軍ト對抗ヲ持續スルモノノ如シト又天津
軍ハ昨日北京並ニ天津ニ於テ國際列車
トシテ列車五個ヲ柳角スルヲ決定セ



161530

0904

不詳記

リト云フ右列事、既乱中、北京天津間交通
通用ニ充當スル筈ナルモ一時其杜絶ヲ見ル
コトアラント尚津浦鉄道方面退去ノ際
白河交通線ニ於テ混乱アルベトノフトナリ

三十一日



161530

0905

秘

五. 三一 五九 四の五
六. 一 前二 二九 一 看

(在天津)

柴田中佐

海軍次官
軍令部次長

「タ」九九

天津情報 第五

一、奉軍退却、關、下國幹、野、少將、對南方派一部ト妥協成立、見、確實ト認、許容シタ、カ如キ口

吻シ漏シタリト云フ

二、情報第四ニ依リ推察ス、琉璃河防禦陣地構築モ要ス、北京撤退シ容易ナラシム、目的ニシテ其撤退ノ時期、遠カラザルモノト認メラレ

三十一日

自昭和三年六月
至同五年七月

支那内乱關係一件
國民軍の北伐關係

二

電信寫



昭和三年 六月九日

晴

北京 本省

六月一日前發

田中外務大臣

芳澤公使

第七七五號ノ二

先ツ此ノ線ニ戰ヒ戰破レタル後退クヘシト激勵シ居ル旨述べたり
一方潘復ハ楊宇璽等ト同様北軍ニ戰意無ク形勢非ナルヲ察シ一
先奉天軍ヲ琉璃河ニ退却セシメ其ノ間ニ蔣介石等ト妥協問題ノ
商議ヲ進メントスル考ナルカ其ノ旨意ハ張作霖カ北京ニ居ル間
ハ自然蔣馮間共同シテ張作霖ヲ目標トスルカ故ニ兎ニ角張ヲシ
テ討赤ノ目的ヲ達セリトカ何トカ偽造姓名目ヲ設ケテ連ニ北
京ヨリ立退カシメ其ノ上ニテ蔣馮ト妥協シ反馮同盟ヲ作ラント

スルモノノ如ク目下ノ處ニテハ奉天兵ノ北京駐在ヲ認メタル上
ニテ妥協成立スル見込有ルモノノ如シ

目下楊宇霆ハ蔣介石ノ使者（過日北京ヨリ葛光廷南京ニ赴キ打
合セノ結果數日前來京シタル楊ト士官學校同期生）ト會商ヲ進
メ居ルカ關錫山モ士官學校出身尹某ヲ派遣シ居レリ云々

然レトモ各方面ノ情報ヲ綜合スルニ現在ノ形勢ニテハ馮玉祥反抗
ヲ目的トスル張蔣又ハ張蔣間ノ妥協ハ到底成立シ得サルモノノ如
ク又琉璃河ニ南軍ノ到達スルニハ若干ノ時日有リトスルモ結局琉
璃河線ノ維持ハ先ツ不可能ナリト觀測セラル

奉天、上海へ轉電シ天津へ暗渡セリ

昭和3 七〇八八 略

北京 本省

六月一日後着

田中外務大臣

第七八七號

往電第七七九號ニ關シ

六月一日午後三時半各國公使全部及公使館附陸軍武官並ニ漢文
贊（本使ハ建川武官及有野同伴）大元帥府居仁堂ニ參集シタル處
張作霖ハ大要

「余ハ東三省ニ於テ多年保護安民ニ力ヲ致シ入京以來モ何等政治
的野心ヲ有セス專ラ赤禍討伐ニ努メ内外人ノ保護及治安ノ維持ニ
努力シタルカ不幸ニシテ政治上充分ノ成績ヲ擧ゲ得サルノミナラ

ス赤禍討伐亦豫期ノ結果ヲ冀ラスニ至ラサリシハ誠ニ遺憾トスル
處ナリ爾ニハ屏息爭ノ通電ヲ發シ全軍ヲ後退セシメタルハ全ク軍
民ノ苦痛ヲ見ルニ忍ヒス速ニ内亂ヲ收拾シ累ヲ在留民ニ及ホササ
ラン事ヲ希ヒタルカ爲ニシテ今ヤ此ノ趣旨ニ基キ兵ヲ收メントス
ルニ際シ余ノ苦衷ハ各位ノ充分諒解セラルル處ナルヘシト信ス將
來再ヒ北京或ハ東三省ニ於テ再會ノ機會アルヘキ處茲ニ既往一ケ
年間ニ於ケル各位ノ厚誼ヲ謝ストノ趣旨ヲ述ヘ右ニ對シ和蘭公使
外交團ヲ代表シ簡單ニ各國在留民保護ニ對シ努力セラレタルヲ謝
スル旨答ヘタリ

要スルニ右張ノ挨拶ハ北京引揚ノ決心ヲ披露シ同時ニ外交團ニ對
スル留別ノ意味ヲ表シタルモノト認メラル
哈爾濱、吉林、天津、奉天、上海、漢口、青島、濟南、廣東、福
州へ轉電セリ

電信寫

(分類 46.1.51-2)

昭和3 七〇〇六 略

漢口 本省

六月一日前着

亞

田中外務大臣

第二四〇號

高尾總領事

一 兩日來武漢軍ノ行動著シク緊張味ヲ呈シ來リタルニ依リ卅一日
田中ヲ李宗仁ノ許ニ遣ハシタルニ李カ語リタル要領左ノ通
二 京漢線方面ノ南軍兵力手薄ノ爲過般來一時戰況幾分不利ノ狀況
ヲ呈シ馮玉祥及南京政府ヨリ積極的北伐參加ヲ懸通シ來リ軍費
モ中央ニ於テ相當額補助ノ見込立チタルト武漢派陰謀ノ首魁程
潛モ斷然處分シ最早後顧ノ憂無キニ至リタルニ依リ武漢軍モ愈
々積極的北伐戰線ニ參加スル事ニ決定シ既ニ河南ニ出動中ノ十

二軍三十軍三十六軍及七軍ノ一部ノ外當方面ヨリ更ニ十三軍十七
軍四十四軍十九軍ノ一部並ニ獨立第八師等ノ大軍ヲ北上セシムル
事トナリタルカ此ノ總兵數十餘萬ニ達シ其ノ内主力軍約十萬ハ直
ニ石家莊ニ集中シ殘餘ハ豫備隊トシテ河南ノ要地ニ分駐セシメ友
軍ト呼應シテ京漢線方面ノ北伐ヲ決行スル筈ニシテ一兩日ヲ以テ
的軍事輪運ヲ開始セリ白崇禧ハ六月一日前敵總指揮ニ就任シ三日
頃當地出發石家莊ニ赴キ武漢軍ノ總指揮ニ當ルヘシ
尙三十日附ヲ以テシユカチ總司令部兵站監ニ尹迪賢ヲ兵站關係兼
參謀長ニ任命シ石家莊ニ先發シテ兵站關係ヲ準備セシムル筈
曰南湖ノ治安維持ハ胡宗鐸（十九軍）陶鈞（十八軍）李曉炎（四十
三軍）獨立第五師ヲシテ湖北ヲ靜養平（二軍）陳嘉佑（十四軍）

何健（三十五軍）ヲシテ湖南ヲ擔當セシム

③天津ノ各國駐屯軍カ警備區域ヲ劃シ二十支里以内ヲ中立地帯ニ設定スル事ニ異存無シ此ノ場合我軍ハ昨年ノ上海ノ例ニ準シテ處理スヘク但シ各國軍隊ハ該區域内ニ敵軍ノ通竄スル事ヲ禁止シ嚴正ニ武裝ヲ解除スル事必要ナリ然ラサレハ我軍モ已ムヲ得ス此ノ區域ニ進入スルニ至レハナリ云々

在支公使、上海、天津、濟南、青島、南京、長沙へ轉電シ重慶、宜昌、沙市、九江へ暗送セリ

秘

陸同文

電報

昭和三年六月一日

五月三十日午後五時

參謀次長宛

在北京 支那公使館附武官

支第二五八号(其二)

奉天軍ハ三、四方面軍主力ヲ以テ琉璃河附近、

孫傳芳軍ヲ以テ霸縣(天津西方十七邦里)附近

ニ後退シ集團司令部ハ長辛店ニ設置スルニ

決シ各方面トモ逐次後退中ニシテ右ノ線ニ於テ

隊伍ヲ整頓シ後圖ヲ策セントスルモノ、如シ一方

南方ニ派遣セシ代表ノ歸來ニ依リ蔣介石一派

及閻錫山トノ妥協問題ニ相當進捗ノ氣

運ニ在ル故萬一ノ望ヲ樹ケテ一時形勢ヲ觀望セ

トスルモノ、如ク推セラル、尙張作霖ハ頑迷ニシテ

関内撤退ヲ肯セサル由ナリ

楊宇霆モ此事ニ就テハ強イテ主張スルヲ得サル
立場ニ在リ親爺ヲ説クハ學良ノ役トナレアルカ如
キモ學良モ親爺ノ見幕ニ恐レテ未タ敢テ
直言スルノ勇氣ナク各將領及元老等ニテ徐ニ
口説キ落スハ外策ナシト爲レアル模様ナリ、張
學良、楊宇霆ハ今日ノ中ニ長辛店ニ到リ
戦線ノ整理ヲナスト

関東、天津、朝鮮、奉天、3D、6D、スミ

(秘)

陸同文
電報

參謀次長宛

天電第二六七号

段宏業ノ誤

一奉天軍退却後反馮勢力ハ勃興ハ必然的ニテ馮軍

ノ前進ニ鑑ミテハ宜ク奉天軍ノ退却ハ一日モ速ク

ヲ有利トス反馮勢力ハ馮軍内部ニ相害多ク

樊鍾秀、李虎臣、岳維峻等ハ既ニ反馮ノ約アリテ

奉天軍ノ國外撤退ト同時、内外呼應シテ馮ヲ擊滅

對馮ノ一攸應リ見ルニ後彼等ノ推挙ニ依リ段ノ出處

トナシヘシ

二万一討馮計畫失敗ニ終リテ時局ノ拾收ハ到底

昭和三年六月一日

五月三日 午後三時、四時、五時、六時、七時、八時、九時、十時、十一時、十二時、

支那駐屯軍司令官

能くはけん所ニシテ終局場、天下トナリ北支政局
苟分委負制ニ依リ支配セラル外無クシテ
關東、北支、上海、奉天、60、30、皆、

此支.

三、六、二一 前七、一、六

桑 著

(在天津) 柴田 中佐



7

海軍次官
軍令部次長

7/11

タナシ一三

天津情報第七号

一、一説ニ依レバ太原ニアリシ干珍ハ二十九日張家口

着昨日若ハ本日着京ノ筈ニテ閩ノ左記意志

ヲ張作霖ニ傳フル由ナリト云フ

(イ) 張ハ大元帥政治ヲ廢シ関外ニ撤退スルコト

(ロ) 北京ノ過渡期ニ於ケル時爲ハ王士珍揚子霆

干珍ニヨリ維持スルコト

(ハ) 馮軍及蔣軍ハ山西軍及奉天軍トノ協同勸



161530

0923

告ニ依リ北京ニ進入セシメズ、

(二) 奉天派ニ対シテハ東三省ノ地盤ヲ認ム、

(十) 和議ノ方法ハ孫逸仙ノ建國大綱ニ依ル、

二、目下張學良及楊子雲トノ任地、折衝行ハレツ

アリトノ説アリ、

一日

此支

三、六一 台

(天津)

木田中佐

海軍次官
軍令部長



Handwritten signature or mark.

Handwritten number '114'.

夕七九四

天津情報 第四号

一、保定ヨリ帰京セル張欽伯ノ言ニ依レバ、三十日張楊

等保定引揚ゲ、際家具全部輸送セリトノ事ニテ

恐ラク軍團司令部ノ保定ヲ引揚ゲタルハ事實ナ

ルバ、引揚地点ハ琉璃河ナルベシトノ説アリ

該地附近ニ陣地構築ノ為至急土人五百名徴

發方北京警察ニ命ジタリト云フ

二、北京警察ノ報トシテ聞タトコロニ依レバ、保定ハ三



161530

0925

十日馮軍ニ占領セラレ奉軍ハ續々退却中ニシテ
高碑店、長辛店間ニハ約三十列車アリ萬福麟ノ
第八軍約八千ハ保定ニテ馮軍ノ包圍ニ陷レリ、
尚三十一日午前三時ヨリ京漢線ハ不通トナレリト、
三、二十九日ヨリ當地總站、塘沽附近ノ鐵道輸送材料
ヲ盡ク唐山ニ送還中ニシテ三十日唐山ニ機關車四
十五ニ集中セリ、

四、諸情報ヲ綜合スルニ、保定放棄ハ滿城方面ノ
戦利アラサルノミナラズ馮軍ノ主力京漢線方面ニ
現レタルニ依ルモノト認めラル、

五、張作霖ハ張家島ニ對シテ琉璃河方面ニテ決戦
スベキニ付猛進スルコトナク現戦線ヲ守備スベキ旨
電報ヲ發セリト云フ、

三十一日



秘

陸同文

電報

參謀次長宛

關電第一八四号

張作霖ト最近關係深中營口某商店ニ到

達セシ情報ニ依リハ張ハ明後二日北京發奉

天ニ歸還スヘシト參考迄

昭和三年六月一日

五月三日午後九、三、五着

關東軍參謀長



(分類 161530/2)



161530

0927

此支

三六 一四一三
二五二一

葉山

(天津) 柴田中佐

海軍次官



下

リナ一五

軍令部次長

天津情報第八號

一、張作霖第五夫人外家族三千名一日午前九時三十分天津通

過奉天ニ向フ

二、元帥府事務用品其他シニ列車ニ搭載シ一日朝奉天ニ向

ヘリト

三、張學良、楊宇霆ハ一日午前七時發疏瑤河ニ向ヘリト云フ

四、三十日朝某ノ自動車ニテ彼等ハ京漢線方面情況

一、奉軍ハ保定ヨリ二十九日夜半司令部及後方機關ノ撤

退ヲ始メ漢口ニ至リ三十一日午前中ヲクハ不方順橋附近東西

ノ線ニアリテ満城、宛妙方面ノ情勢大ニ変化ナリ

只紫荊關方面ヨリスハ山西軍ノ東進、其後鋒リ急進

シ告ゲアルモ、如ク奉軍主力ノ戰場離脱ノ為收容

陣地トモ見ラレバキ待水ノ陣地ハ一層強度ヲ加ツツモ

ノ如シ

ハ琉璃河南側ニハ正面數十里ニ亘リ最近大イ志立射撃

兵濠ヲ構築シアリ退却ノ際使用スルキ一時的ノモノナラン

前線ヨリ傳來セシ司令部將校ノ談ニ依ルハ右陣地ハ

先頭ニ退却シ來シ第十六、十七、三十軍ヲ配置スル企圖

ナリト琉璃河市街ニ各所ニ司令部ノ配宿ヲ定メアリ

ニ京漢線ノ列車ハ目下停定ニ近ク集團セシメ

テ琉璃河ニ未ダ大部隊ノ後送セラレシ見ズ

其三上ヨリ三時豐台ニ在リ騎兵第十六、十七聯合軍奉給不復

シ爲擾乱ヲ起サントセシモ大事ニ至ラズ解送セリト云

電信寫

支

昭和3 七一三三

暗

北京
本省

六月二日後着

亞一

出中外務大臣

第七九二號（主慰）

往電第七九一號ニ關シ

張作霖ハ二日二時町野ヲ本使ノ許ニ遣ハシ自分（張）ノ部下ハ決
戦スル積リナルモ自分カ北京ニ在ル間ハ萬事都合悪シトテ自分ニ
退京ヲ迫リタル故二日深夜北京發奉天ニ向フヘク退京後北京、天
津間ニ決戦ヲ見ルヘキカ天津司令官ノ希望通天津廿支里以内ニハ
軍隊ヲ立入ラシメス但シ天津市内ニ往復スルコトアル故大目ニ見
テ賞ヒタシト傳ヘシメタリ

モ

芳澤公使

シ

Yh



以上ノ次第ニテ張ハ其ノ部下ハ決戦スト言ヒ居ル趣ナルモ目下ノ
形勢ヨリ判スレハ若シ張力眞實右様信シ居ルトスレハ或ハ部下ヨ
リ甘ク欺カレタルモノニアラスヤト思ハル

天津、青島、濟南、上海、漢口、南京、福州、廣東、奉天ニ轉電
シ奉天ヨリ在滿各領事ニ轉電セシム

電信寫

此支

昭和3 七一三七 暗

北京
本省

六月二日後著

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第七九三號（至急）

往電第七九二號ニ關シ

二日潘復ハ常ニ出入スル順天時報野口記者ニ對シ大要左ノ如ク語

レル由

張作霖ハ二日午後十時外交及内務兩總長ヲ殘シ他ノ各總長ト共ニ
北京發奉天ニ向フ退京ニ先立チ退京ノ理由及京津地方内外人保護
ニ關スル二個ノ通電ヲ發スヘシ各總長ヲ同伴スルハ北京政府ハ大
元帥ニ隸屬スル軍事政府ニシテ大元帥ハ下野スルモノニアラサル

カ故ニ大元帥ト行動ヲ共ニセムトスルモノナリ外交總長カ居殘ル
ハ大元帥ノ退京後對外問題一層複雑トナルヘキカ故ニ之ヲ善處セ
シムルカ爲又内務總長ノ居殘ルハ警察廳及第四十六旅ト協力シテ
治安ヲ維持セムカ爲ナリ京師ノ治安ニ關シテハ内務總長ハ既ニ右
警察廳及軍隊ト對策ヲ講シ居ルカ故ニ内外人安心シテ可ナリ軍事
ニ關シテハ目下張學良、楊宇霆、孫傳芳、褚玉璞、張作相、張宗
昌等ノ諸軍ハ京津ニ近キ地方ニ集中シツツアリ京津ヲ拋棄スルカ
將又之ヲ死守スルカ未タ決定セサルモ北軍トシテハ成ルヘク武裝
的平和ヲ要求シ唯敵軍ノ攻撃アラハ京津地方ニ戰フコトアルヘキ
モ進軍スルコトナカルヘシ孰レニセヨ北京及天津ハ兵火ノ渦中ニ
投セサルヘク但シ天津ノ港灣ハ絕對ニ拋棄セス云々
奉天、大津、上海、濟南、青島、漢口、南京ニ轉電セリ

電信寫

此支

昭和3 七一三八 暗

北京 本省

六月二日後着

亞

田中外務大臣

第七九四號ノ一

往電第七八六號ニ關シ

此ノ際支那側ヲシテ北京ノ治安維持ニ付出來得ル丈ノ努力ヲ爲サ
シムル事必要ナルト同時ニ支那側計畫ノ内容ヲ詳細承知シ度考ニ
テ二日王士珍ヲ往訪シ（建川武官原田副官同伴）種々質問應答ヲ
重ネタルカ王ノ述ヘタル處大要左ノ通
一 張作霖二日夜離京スヘキモ其ノ際ハ僅ニ一營餘ノ護衛隊ヲ連レ
行クノミニテ其ノ餘ノ部隊ハ依然殘留スルニ付明日ヨリ五日間

モ

芳澤公使

16

ハ今日ノ状態ト異ナラス警備上何等ノ變動ヲ見サルヘシ
一 先發護衛隊ノ補充ハ三方面軍ヲ以テシ將來同軍離京ノ際ハ山西
軍或ハ馮軍入り來ラサルヘシ併シ假令馮軍入り來ル事有ルモ一
部ノ入城ニ止マリ大部隊ハ南苑ニ駐屯スヘク又山西軍入城ノ場
合治安ノ任ニ當ルハ譚慶林軍ナラン

(續ク)

電信寫

昭和五 七一四〇 略

北京 本省

六月三日前着

亞

出中外務大臣

芳澤公使

第七九四號ノ二

北京ノ治安維持ハ多數諸外國人ニ關係有ル事故自分等ハ大責任ヲ以テ之ニ當ル決心ニテ今夜張作霖出京後明日中ニハ治安維持會モ正式成立スヘク會長ニハ熊希齡ヲ推ス所存ナリ

治安維持ニ當ル兵力ハ巡警一萬一千餘銃騎軍九千計ニ屬ナルカ五日以後軍隊交代等ノ際或ハ小事故ノ發生等ハ保シ難キモ大事件ノ發生ヲ見ル事無カルヘシト觀測シ居リ本會成立ノ上ハ日本側ノ特別ノ贊成ヲ得タシ

一 富方面ヨリ撤退スル奉天軍ハ徒歩ニ依ラス全部鐵道ニ依ル事ト
ナルヘク其ノ順序ハ先ツ護衛隊次テ三四方面軍トナリ其ノ撤退
ニ鮮カラサル日數ヲ要スヘシ

一 同席セル王ノ參謀饒孟任ノ談話中參考トナルヘキ點ハ北京ニ於
ケル便衣隊及共匪黨ニ對スル取締ハ既ニ南軍首腦者ヨリ活動中
止方命令セラレタル筈ナレハ恐ラク何事モ起ラサルヘシ

天津、奉天へ轉電セリ

此支

夕十七。

當地總領事館報

海軍次官
軍令部次長

(天津) 第九驅逐隊司令

三浦

夕

二日前前一時ヨリ午四時ノ間白河ノ下流ニ砲聲聞エ
住民ハ時節相非常ノ恐怖ニ驅レタリ取調ベノ結果奉
天軍ノ敗兵二百名軍糧城ニ於テ掠奪ヲ始メタモノニ
シテ支那守備隊ト戦闘ヲ交ヘ午四時終結、掠奪
兵ハ民船ニ依リ白河ヲ下リタリト云フ
右ニ関シ梅シシテ午後一時三十分塘沽警戒シ兼
ネ天津ニ通知セシム

二日



161530

0949

し
ま

昭和 三 七 一 七 八 平

北 京
本 省

五 日 後 着
六 月 三 日

亞

田 中 外 務 大 臣

第 七 九 七 號 (至 急)

張 作 霖 ハ 三 日 午 前 一 時 十 五 分 潘 復 始 ノ 關 員 ノ 多 數 ヲ 隨 ヘ 大 元 帥 ノ

制 服 ヲ 着 シ 五 百 ノ 護 衛 ニ 護 ラ レ 從 來 政 權 首 腦 者 離 京 ノ 場 合 ト 異 リ

正 ヲ 堂 ヲ 退 京 セ リ 市 内 ノ 警 備 ハ 嚴 重 ニ シ テ 平 穩 ナ リ 尙 大 元 帥 ハ 出

發 ニ 臨 ミ 別 電 ノ 通 電 ヲ 發 セ リ 孫 傳 芳 ハ 出 發 ニ 先 タ チ 二 日 午 後 十 一

時 半 着 京 セ リ

天 津 、 奉 天 、 青 島 、 濟 南 、 上 海 、 漢 口 、 香 港 、 廣 東 、 福 州 、 南 京

ヘ 轉 電 シ 奉 天 ヲ リ 在 滿 各 領 事 ヘ 轉 電 セ シ ム

芳 澤 公 使

9/11

昭和五 七 一 八 八 年

本省

六月三日 後着

田中外務大臣

第七九八號ノ一（至急）別電

ニ内亂終熄セス外交ニ波及スル所アルヲ以テ全國ニ通電シテ各方面ノ軍事ヲ撤退シ停戦ノ意思ヲ表示セルハ既ニ周知ノ事實ナリ今ヤ彼此覺醒シテ速ニ紛糾ヲ止メ友邦ノ憂慮疑惑ヲ解キ未來赤化ノ防止ヲ期スヘキ秋ナリ然ルニ外交ノ危機愈急迫シ國內ノ爭亂未タ熄マス戰禍將ニ京畿ニ及ヒ禍害ノ中外ニ及ハム事ヲ恐ル數年來ノ戰塵ヨリ商民業ヲ廢シ産業萎微シ百姓流離シ餓夫道ニ滿ツ其ノ慘狀言フニ忍ヒサルモノアリ更ニ武力ヲ用キムカ徒ニ民生ヲ苦シムルモノニシテ即チ討赤ノ初志ニ反シ和平停戦ノ本旨ニ背クモノナリ先年此ノ難局ニ當リシハ元救國ノ爲ナリシナリ（續ク）

芳澤公使

昭和 三 七 一 八 七 平

北京 本省

三日後發
六月三日後著

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第七九八號ノ二（至急）

今ヤ救國ノ志願未タ達セラレスト雖獵ニ兵ヲ用フルニ忍ビス茲ニ
諸部ヲ統率シテ京畿ヲ退却ス中央ノ政務ハ暫時國務院ヲシテ攝行
セシメ軍事ハ各軍團長ヲシテ各管ヲ司ハシム爾後政治問題ハ之ヲ
國民ノ裁決ニ委ス要スルニ共和國家ノ主權ハ民ニ在リ而シテ天下
ノ公器ハ當局之ヲ守ル作霖ハ其ノ半生軍ニ從ヒ凡ユル世ノ變遷ニ
遭遇セリ而モ民ニ利益アラムコトヲ期シ毫モ犧牲ヲ吝マス其ノ庶
幾セルハ民國ノ基礎ハ作霖アルカ爲ニ斷タレス共產惡化ハ作霖ノ
爲ニ起ラサルコト之ナリ之即チ天下公生ニ罪無キヲ告クルヲ得ル
所以ナリ特ニ衷情ヲ披瀝シテ諒察ヲ希ハムトス（六月二日附）

電信寫

此支

昭和 三 七二〇九 暗

北京 本省

六月三日 午後

亞

田中外務大臣

第七九九號ノ一

往電第七九四號ニ關シ

二日有野ヲシテ治安維持會ノ組織ニ奔走シ居ル孫學仕（京師商埠
總會長）及吳炳湘（元警察總監）ヲ訪問セシメタルニ王士珍ト略
々同様ノ談話アリタル外夫々左ノ通語リタル趣ナリ

一日張作霖ノ呼出ニ依リ出頭シタルニ張ヨリ近ク引揚ノ筈ナル
處治安問題ハ王士珍ニ指示シアルニ付相談セヨトノ話アリ自分
（孫）ハ鮑鏡麟ノ軍隊二千乃至三千ヲ一時殘留セシメラレタシ

芳澤公使

ト申出タルニ張ハ不賛成ノ意ヲ表示セルカ何トカ同軍ヲ引留メ
タキ積リニテ引續キ交渉中ナリ

一警察ノ方ハ經驗アル吳炳湘ヲシテ組織セシムル豫定ニテ吳ハ既
ニ内諾セリ（以上孫學仕）

一昨下警察總監陳興亞在任中ナルヲ以テ表面的ニ治安維持會ヲ組
織スルヲ得サル爲メ先般來商務總會出字會悟善社等協議ノ上京
師事前救濟聯合會ナルモノヲ組織スル事トシ（續ク）

昭和三七二〇八

北京
本省

大月三日午後

田中外務大臣

芳澤公使

第七九九號

同會ハ六月一日中央公園ニテ在野ノ有力者二十人集會ノ上成立セリ陳興亞ハ一日辭表ヲ提出シタル處之カ許可アルヲ俟ツテ右聯合會ヲ治安維持會ニ變更スル段取ナリ

て鮑軍ハ結局殘留ノ見込ナリ張學良。楊宇霖ノ軍ト入レ替リニ引揚クル事トナルヘシ

譚慶麟軍入城ノ場合ニ於テモ前以テ張學良、楊宇霖等ト打合セ
ノ上平和的ニ交替スル事トナルヘク又譚軍入城ノ事ハ既ニ南軍側

主腦協議ノ上ナルモノノ如シ

「自分（吳）ノ巡警指揮ノ件ハ聯合會ヨリ既ニ交渉アリ盡力スヘキ意嚮ヲ答ヘ置ケリ（以上吳炳湘）」

尙一日及二日ノ元帥府會議ニテハ干珍（之迄太原ニ抑留セラレ居リタルカ今回放免セラレ不日入城ノ由）ニ奉天軍ノ一部ヲ引繼キ一時北京ノ治安維持ヲ維持セシノムトスル案ヲ提議セラレ干ノ諾否ヲ待ツテ決定セラルヘシトノ散アリ

奉天ヘ轉電シ天津ヘ暗送セリ

北支

昭和3 七一四五 暗

天津 本省

六月三日前着

亞

田中外務大臣

加藤總領事

第一二二號

國民政府代表張壁六月二日白井へノ内話

張作霖撤退後ノ天津地方治安維持ニ付在津反奉各派ニ於テ夫々

準備中ノ由ナルカ國民政府ノ正式委任ヲ受ケタルモノハ自分ニ

シテ他ハ何レモ各自ノ運動ナレハ右御承知置キアリタシ

自分ハ直隸政權授受ノ方法トシテ目下折角考究中ナルハ現直

隸官憲中知邊多ク殊ニ總參議張冠國トハ馮玉祥時代ノ同僚タリ

シ關係上人ヲ介シ素直ニ事務引繼方ヲ交渉シ居リ彼等ハ何レモ

大體賛成ナルカ張宗昌、褚玉璞ノ意見尙不明ナリ(二)幹部カ素直
ニ事務引繼ヲ肯セサル場合ニハ軍醫下級ノモノ全部ヲ味方トシ
幹部ヲ追フコトトナルヘキモ其ノ手筈モ著々進行中ナリ殊ニ目
下霸縣ニ在ル孫傳芳ノ部下トハ完全ニ瞭解ナリタルニ付(此ノ
點極秘トセラレタシト附言セリ)萬一ノ場合天津ノ治安維持ニ
ハ差支無キ自信ヲ有ス

三 自分ノ關スル限り我方部隊ハ絕對ニ租界ヲ侵シ又ハ日本人ニ危
害ヲ加フルカ如キコトナキヲ以テ萬一斯ル不逞ノ徒アリトセハ
國民革命軍ト稱スルモノアリトモ日本軍ニ於テ隨時處分セラル
ルコト寧ろ我方モ望ム處ナリ以テ國民革命軍力亂ヲ計ルトノ誤
解ヲ避ケタシ

馮玉祥側代表、山西側代表トハ聯絡ヲ取リツツアルモ彼等ハ自分ノ計畫ニハ何等干與セス彼等ハ大部分ノ到着ヲ俟チタル上政權授受ヲ實施セムコトヲ提議シツツアルモ自分等ハ蔣介石ヨリ受ケタル使命ニ基キ一日モ早ク青天白日旗ヲ天津ニ掲クルコトニ劃策シツツアル次第ニテ追テ定メラルヘキ地盤問題ハ自ラ別

問題ナリ

北京、奉天、上海、青島、濟南へ轉電セリ

此支

電信寫

昭和3 七二六二 略

北京 本省

六月四日後著

芳澤公使

亞

田中外務大臣

第八〇二號ノ一

往電第七九四號ニ關シ

北京ノ治安維持ハ鮑毓麟ノ軍隊引揚第三、四方面軍入替リ一時之

ニ當ル計畫ナリシ處其ノ後豫定變更鮑ノ一旅最後迄居殘ル事ニ決

定シタル趣ニテ四日鮑挨拶旁本使ヲ來訪シ大要

一今回各方面ノ懇請ニ依リ自分（鮑）ノ軍隊丈最後迄居殘リ引揚

キ治安ノ維持ニ當ル事トナリタルニ付テハ自分ハ非常ノ決心ヲ

以テ之ニ當ル積リニテ夫々警備ヲ手配シアリ自分ノ駐在中ハ決

シテ累々外國人ノ生命財産ニ及ボス力如キ事無キ様保護ニ盡力
スヘキニ付安心セラレタシ同時ニ日本側ニ於テ種々謠言ニ惑ハ
サレ罷ニ軍隊ヲ公使館區域外ニ使用スル事ヲキ極希望ス

マ自分ノ所屬軍隊ハ總數五千餘ニシテ一般治安維持ハ勿論便衣隊
共產派等不穩團體ノ彈壓ニモ充分ナリ從來取締ヲ勵行シタル結
果現在是等不穩分子策動ノ形跡ナシ

マ自分ノ軍隊居残りニ關シ昨三日當地各團體及元老ノ名ヲ以テ蔣
介石、閻錫山、馮玉祥三人ニ對シ總ノ軍隊ハ各方面ノ懇請ニ依
リ北京ノ治安維持外人ノ保護ノ爲殘留スルモノニシテ(續ク)

北支

✓

昭和3

七

二

一

日

天津
本省

六月四日前着

加藤總領事

亞一

田中外務大臣

第一三〇號

六月三日白井力張宗昌ニ從ヒ居ル一邦人ヨリノ懸込ニ依レハ往電

第一二五號ノ通津浦線ニ沿ヒ陸路退却ノ孫軍ハ楊柳青、北倉一帶

ニ赴クモノニシテ天津ニ移動スルモノニ非ス當地ニハ目下張宗昌、

褚玉璞、孫傳芳アリ彼等ハ天津ノ治安維持策ト共ニ其ノ軍ノ處置

ニ付目下協議中ニシテ比較的落著キ居ル様子ニ見受ケラル

北京、奉天、上海、青島ニ轉電セリ

電信寫

昭和3 七二三〇 暗

天津 本省

六月四日後着

亞一

田中外務大臣

加藤總領事

第一三一號

直魯軍撤退ヨリ南軍到着迄ノ期間ニ於ケル當地支那街ノ治安維持
ニ關シ當地支那紳商界ニ治安維持會ノ組織内々進行中ノ由ナルカ
同會ハ當地地方紳商ノ領袖嚴收ヲ首領トシ總商會教育會省議會等所
謂法團ヲ糾合シ黨派ニ關係ナク各國側トモ聯絡シ現在ノ警察保安
隊ヲ以テ市中ノ秩序ヲ維持シ資金ヲ集メテ敗兵ヲ解散スル等ノ方
法ニ依リ一時治安ヲ維持セントスルモノニシテ従前ハ會ノ性質ニ
鑑ミ現當局トノ間ノ了解ヲ缺キ實行行儀中ナリシモ張作霖ノ撤退

ニ依リ此ノ方法ニモ進ミタルモノノ如ク近ク正式ニ組織發表セラ
ルヘク尙本件紳商治安維持會ト國民黨ノ李延玉等カ計畫シ居ル同
機性質ノ會トノ關係又國民政府山西側及馮玉祥ノ各代表等ノ天津
乘取計畫ト如何ナル程度ノ聯絡了解成リ居ルヤハ不明ナルモ比較
的ニ實行ノ可能性ヲ有シ居ルヤニ認メラル

北京、奉天、上海へ轉電セリ

秋

此

昭和三年七月二七〇 略

北京 本省

六月五日午後

田中外務大臣

芳澤公使

第八一〇號

往電第八〇九號ニ關シ

四日夕治安維持會正式（成）立シタル旨同會副會長汪大燮ハ周家
彦ヲ派シテ口頭ヲ以テ本使ニ通告スル處アリ原田通譯官代リテ面
接シタルカ其ノ際周ノ内話セル處左ノ通

一治安維持會四日夕急遽其ノ成立ヲ見タル原因ハ先方トノ妥協不
成立ニ基ケルモノニシテ治安維持ノ責任者タル陳警視總監ハ既
ニ三日離京セリトモ傳ヘラレ張學良、楊宇霖亦極メテ消極的ト

ナリタル爲急轉直下成立シタルモノナリ

張作霖ノ通電ニハ政務ハ國務院ヲシテ攝行セシムトアルモ事實ハ然ラスシテ大元帥府及內閣ノ奉天移轉ト見ルヲ得可ク右ハ大元帥及其ノ他各機關ノ印章ヲ概ネ携行シタル節ニ徴スルモ明カニシテ實業總長張惠景ノ如キハ同部ノ書類迄モ持去リタリト傳ヘラル

ハ妥協問題ハ如上ノ事實ニ加フルニ要點タル張作霖ノ下野及歸滿ニ對シテハ奉派ハ之ヲ拒絕シタル上更ニ奉天、塘沽間ノ京奉線管理ノ條項アル趣ナレハ妥協ハ到底不可能ナラム云々

奉天、上海、南京、天津へ轉電セリ

電信寫

秘

昭和 七三三四 暗

北京 本省

六月五日後着

亞

田中外務大臣

芳澤公使

第八一三號

往電第八一〇號ニ關シ

五日熊希齡ノ有野ニ對シ爲シタル談話要領左ノ通

成立セル會ノ名稱ハ京師臨時治安維持會ト定メ軍警、外交、教

育、財政、公債ノ五股ヲ設ケ會長副會長（往電第八〇九號參照）

ハ既ニ就任シ四日夜ヨリ事務ヲ開始セルカ同夜吳炳湘警察廳ノ

引繼テ了セリ（陳興亞ハ同日離京セリ）

同會配屬ノ武力トシテハ鮑統麟ノ軍隊約五千（既ニ京師保安處

S

161530

1017

ト改稱セリ一巡警一萬一千並ニ王琦所屬ノ憲兵約一千合計約一
萬七千ニシテ既ニ夫々新配置ニ就ケルカ同時ニ警察署長ノ一部
分ヲ交迭セシメタリ尙目下北京城内ニハ共產黨員約（脱）アル
見込ナルモ便衣隊ナルモノ殆ント無シ

一治安維持會組織ニ就テハ嘗テ自分ヨリ陳介ヲ介シテ譚延闓ニ右
組織ノ意圖ヲ通シタルニ張ノ離京前譚ヨリ右ニ就テハ何等誤解
無キ旨ノ返事アリタリ

一琉璃河方面ノ奉天軍ハ今明日中ニ退却ヲ完了スヘシ目下各城門
ニハ敗兵收容所ヲ設ケ毎日數十乃至百數十ノ敗兵ヲ收容シ居レ
リ南方側ニテハ山嶺ノ結果關錫山ヲ北京衛戍總司令ニ任命スル
事ニ決定シ關ハ直屬部隊ヲ率ヒ四、五日後退却トモ一週間以内

ニ保定ヨリ到着入城スヘキ模様ナリ
閩ノ軍隊ハ戦闘力薄弱ナル
モ軍規素質共良好ナレハ一般ニ歡迎セラルルモノト思考ス

奉天、天津へ轉電セリ

秘

245

昭和3 七四二二 暗

天津 本省

六月六日後着

亞

田中外務大臣

加藤總領事

第一四六號

一、京奉線ニ依ル奉軍退却ハ連日引續キ行ハレツツアリテ當地ヲ通
過シ北上セル軍用列車ハ六月三日十七個列車、四日二十五個列
車、五日二十一個列車アリ一個列車ニハ兵員約一千名ヲ搭載ス
ルモ中ニハ什器、家具類ヲ滿載スルモノモアレハ輸送済ノ兵員
總數ハ詳ナラス五日來津セル張學良、楊宇霆等ハ一時軍糧城ニ
司令部ヲ設クヘシト傳ヘラレタルモ爆彈事件ヲ聞キ其ノ他奉天
要人ト共ニ歸奉ノ途ニ就キタリ

一 津浦線方面ニ於ケル直魯軍ノ退却部隊ハ列車少キ爲大部分ハ陸路徒歩ニテ一部ハ運河ヲ民船ニテ天津郊外ニ向フモノト天津南部ヲ横切り軍糧城方面ニ向フモノトアリ馬廠、唐官屯ハ既ニ拋棄セルモノノ如ク退却後部ハ靜海附近ニ在リ五日迄ニ天津河北ニ來着セルモノ約一萬二千ニ達ス

一 直隸省當局行政官ノ主ナルモノハ既ニ職ヲ棄テ避難セルカ下級官吏モ出勤スルモノ少ク官廳事務ハ停止ノ姿ナリ大軍ノ増集セル爲其ノ給與ニ困難ヲ來シ軍醫ノ手ニ依リテ細菌粉其ノ他食料品徴發ヲ強行シ雜穀並ニ現銀ノ移出ヲ禁止スル等ノコトアリ又最近徴收ヲ開始シタル營業許可證稅ヲ強行シツツアルモ支那衛方面ニ於ケル富豪、大商人ハ既ニ租界ニ避難シ居ル爲實收入少

ク財政異常ニ緊張シツツアル模様ナリ

四 尙天津郊外村落ニ於テハ敗兵ノ小掠奪間々發生スルコトアルモ
市中ニ於テハ租界ハ外國兵ノ警備完全ナルト支那街方面ハ張宗
昌、褚玉璞ノ二將領駐在スル爲軍醫ノ警戒一層嚴重ニシテ狀況
一般ニ平靜ナリ

北京、奉天、上海、青島、濟南へ轉電セリ